

お雇いドイツ語教師カデルリーがカナダで書いたス
イス人入植予定地の現地調査報告(1873)を読む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二, 大畑, 夏子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006182

お雇いドイツ語教師カデルリーがカナダで書いた スイス人入植予定地の現地調査報告（1873）を読む

城 岡 啓 二
大 畑 夏 子

0. はじめに

日本最初のお雇いドイツ語教師カデルリー¹（Jakob Kaderli, Jakob Kaderly, Jacques Kaderly）は、離日後、合衆国に渡るが、その後、カナダ自治領のオンタリオ州でスイス人入植予定地を現地調査し、フランス語で報告書²を書いている。カデルリーの伝記³は報告書の存在について触れているが、書誌情報を載せていないので、報告書の探索ができなかった。カナダのノンフィクション作家がまとめた『オンタリオ州のスイス人』（MAGEE：1991）に報告書の書誌情報があり、ネット検索で所蔵先が判明し、バーゼル大学からコピーを入手することができた⁴。フランス語の報告書は、静岡大学人文学部大学院地域文化研究科修士課程を修了した大畑夏子が訳してくれた。本稿では、ドイツ語関係者の便宜のために本稿末尾に翻訳全文を付録にしてある。なお、報告書は移住推進用のパンフレットの一部であり、カナダ政府の移民特別担当官（special immigration agent）であったエリーゼ・フォン・ケルバー男爵夫人（Baronin Elise von Körber）

¹ Jakob Kaderliが本名のようなのだが、日本や外国で本名を変えて使っていた。カーダーリーと日本語で表記するのがドイツ語の発音に近いと思われるが、本稿ではカデルリーに統一した。過去の文献には、カダリー、カドリーなど様々な表記が見られるが、カデルリーという表記がもっとも普及しているからである。

² 本稿で「報告書」と言えばこの報告書のことである。Compte-rendu de mon expédition sur les côtes Sud-est du lac Nipissing, au Nord de la province Ontario en Canada という元題（訳は巻末を参照されたい）の報告書で、*Discours prononcé par Madame de Koerber, dans la conférence tenue a Berne en Septembre passé, pour y expliquer ses démarches relativement à l'émigration*（『移住に関連した活動を説明するために昨年の9月にベルンで開催された会議でのド・ケルベール夫人の講演録』）という題のパンフレットの一部として1877年にベルンのB.-F. Hallerから出版されている。

³ カデルリーにはスイスの郷土史資料としてWALTHER（1898）の伝記がある。本稿で「伝記」と言えばこの伝記のことである。

⁴ ありがたいことに無償で送付していただいた。

がド・ケルベール夫人（Madame de Koerber）として書いた講演録も含まれているが、これは付録の翻訳から割愛した。

カデルリーというひとは日本最初のお雇いドイツ語教師であったが、偉大な人物ではなかったし、来日前も離日後も特筆すべき業績をあげたわけでもなかった。それどころか、変名を使ったり、経歴詐称をしたり、聖人君子として名を残すようなひとはまるで違った人物だった。しかし、彼が普通の常識人だったら、これほど多くの足跡は残さなかっただろう。経歴不詳、行方不明のまま、歴史の深淵から浮かび上がってくることもなかっただろうし、足跡をたよりに彼の人生をたどっていくことはできなかっただろう。21世紀初頭の現在、過去の様々な資料がインターネット上に可視化し始めているが、カデルリー関係資料も例外ではない。

カデルリーは、維新後の明治2年12月23日（太陽暦の西暦では1870年1月24日）に大学南校で日本最初のお雇いドイツ語教師となっている。大学南校時代にはドイツ語の教材を3冊作っているが、なかでも『カデルリー文典』は我が国で作られた最初の本格的ドイツ文法書であり、総合ドイツ語学習教材であった。明治初年の民間の私塾・私学校などのドイツ語教師育成に力をつくした点や洋学校としての体制をととのえつつあった大学南校の雑用も精力的にこなした点から考えても、熱心で有能な教師だったことは間違いないと思われるが、故郷のスイスの郷土史資料としてまとめられたカデルリーの伝記には日本でドイツ語教師をしていたことが書かれず、理系教科の教員と表現され、しかも、何度も日本の奥地に鉱物学や地質学の調査旅行をしたかのように書かれている。カデルリーは大学南校ドイツ語教師時代に『カデルリー文典』を含め3冊のドイツ語学習教材を執筆しているが、伝記はこれにはまったく触れておらず、カデルリーはその事実を故郷のひとに書き送っていなかったようだ。アジアの新興国日本で語学教材を出版し、ドイツ語教育にあたったことが自慢になるとは思っていなかったようで、カデルリーは事実とは異なる報告を故郷への手紙でしていたことになる。大学南校では合計2年程度ドイツ語教師を務めたが、横浜の現地採用の教員として半年程度の短期契約を繰り返すが、4回の契約のうち2回で昇給し、最終的には月給300ドルになっている。大学南校教員の中では教頭のフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck）は別格扱いの600ドルだったが、月給300ドルはお雇い外国人教師の中でも多い方だったようである。したがって、2回の昇給から判断してもカデルリーの仕事は大学南校内でそれなりに評価されていたということだろう。しかし、大学（文部省の前身で、今の「大

学」のことではない) が文部省に編成替えされる中で満期解雇になってしまう⁵。カデルリーは解雇には不満だったらしく、外務省や出来たばかりの文部省を巻き込んで、スイス総領事のブレンワルト (Caspar Brennwald) にも協力を求め、貢献分に見合う追加給与の支払いを要求して譲らず、離日まで争っている⁶。

来日した理由は、北半球をぐるっと世界一周する旅の途上で寄港地として日本を選んだという側面があったようである。カデルリーがウラルやシベリアで長期滞在してから来日したと考えられる1869年は、アメリカ大陸横断鉄道が完成した年であり、その2年前の1867年からアメリカの太平洋郵船による香港—横浜—サンフランシスコの定期航路が開通している⁷。公共交通手段を使った世界一周旅行が実現可能になったのである。その途上で日本を訪れる西洋人も多くなったのは当然のことであった。横浜開港資料館編の『世界漫遊家たちのニッポン』(1996)によると、「世界漫遊家たちの来航が本格化するのは1870年前後からである」(p.37) とあるから、カデルリーはちょうどそういう時期に来日したことになる。しかし、裕福な有閑階級でもなく、作家やジャーナリストでもなく、貿易業に携わるひとでもなければ、まだおいそれと日本まで旅行できる時代にはなっていない。マイスナーは幕末からの横浜居住のドイツ人が基本的に若者だったことに関して、彼らは冒険旅行家などではなく、バタビアや中国在住のドイツ人であり、日本が有望だと判断して、移って来たものであると推定している (MEISSNER 1961: 11)。冒険旅行家が気軽にヨーロッパから来日できるほど旅費は安くなかったのである。マイスナーは幕末の頃のスエズからバタビアまでの渡航費用が200イギリスポンドだったと述べているので、当時南北アメリカ貿易やアジア貿易で広く使われていたメキシコドルに換算して800ドル程度だろうか⁸。かなりの金額である。ヨーロッパから日本までならさらに高額になるわけで、それなりの資金がなければ来日できなかつたし、世界一周など出来なかつたと考えられる。貧しい家に生まれ、イタリアでの傭兵時代以来、流浪の生活を送ってきたカデルリーのようなひと世界一周の夢にとりつかれ

⁵ 契約更新されなかつた理由については不明の点もあるが、城岡 (2008: 181-186) で考察している。

⁶ この争いについては公文書に詳細な記録が残されていて、城岡 (2008) で詳しく述べている。

⁷ 上海と長崎を結ぶ定期航路 (1859) や上海と横浜を結ぶ定期航路 (1864) ならもう少し早く開通している。

⁸ 少し時代は下るが、1ドルは4シリング2ペンスだったという記述もある (DEPARTMENT OF AGRICULTURE 1880: 17)。1シリングは12ペンスなので、50ペンスが1ドルということになる。240ペンス (20シリング) で1ポンドだったので、この換算では1ポンドは5ドルに少し足りないぐらいになるので、200ポンドなら1000ドル足らずという金額になる。

たのだろうか。伝記には、裕福な家での家庭教師で食いつないでいたカデルリーがロシア滞在中に世界一周ということ意識しはじめたことが書かれている。離日後のカデルリーは、ヨーロッパへ帰還する前の最後の寄港地として北アメリカ大陸をえらんでいる。横浜からサンフランシスコへの定期航路便⁹でアメリカ合衆国に上陸し、カナダと合衆国で活動したあと、ユタ州の山岳地帯を旅して、肺炎になってしまうが、最後は、ヨーロッパに帰還し、世界一周の夢を実現させている。カデルリーが世界一周旅行の記録を書くつもりだったとも伝記にあるが、カデルリーの残りの人生には、旅行記を書くために必要な時間はなくなっており、ほどなくして、満47歳で亡くなっている。横浜を出港してから2年数か月後のことである。

城岡はフランス語の語学力がほとんどないが、大畑の翻訳文を訂正した箇所が少なからずある。そもそもカデルリーはスイスのドイツ語圏の出身であり、フランス語を母語とするひとではない。不正確なフランス語を使っている箇所があるし、ドイツ語や英語を紛れ込ませたり、語学的に信用できない部分もあるだけでなく、この地域では英語の地名にフランス語の地名が併用されることがあったり、地名の起源がインディアン語だったり、地図も出来ていない地域の口承地名だったり、カデルリーが地名を間違えているケースもあつたりと、かなり複雑な状況なので、可能な限り点検して、城岡が統一と一部の変更を行い、必要な箇所には注を付けた。翻訳を城岡が変更する場合は正確を期したつもりである。2010年夏にトロントからニピシグ村まで旅行したことも、翻訳内容を検討するのに役に立った。また、19世紀のフランス語辞典も使ったし、カナダ農務省 (DEPARTMENT OF AGRICULTURE 1880) にカデルリーの報告書の一部が英訳されているので、当時の他の資料と合わせて参考にした。しかし、場合によっては、城岡のせいで誤訳を紛れ込ませたかもしれないことは素直に認めておきたい。なお、翻訳の注は二人で書いている。それから、仏文報告書以外のドイツ語や英語の文献の日本語訳は城岡によるものである。

また、本稿では、報告書の解説や内容の検討以外に、これまでに城岡が書いた3本のカデルリー関連の論文の内容を簡単に紹介して、さらに、3本の論文以降に明らかになった次の2点についても書いておくことにしたい。

⁹ 横浜とサンフランシスコの間は約三週間かかったようだ (『世界漫遊家たちのニッポン』、p.39)。大学東校にドイツ医学を持ち込み、ドイツ式の医学部を作ろうとして医学教育の大改革をしたミュルレルの場合は、1870年8月1日にサンフランシスコを出発して、8月23日に横浜に到着している (MÜLLER 1975: 13)。

- ① 日本産貝類の研究で知られるドイツ人貝類学者リシュケに協力していたこと
- ② サンフランシスコに実在した複合娯楽教養施設ウッドワードガーデンでカデルリーの鉱物標本が展示されていたこと

さて、お雇い外国人は日本近代史の一部であったと言えるが、カデルリーの生涯はスイス史（傭兵の派遣）、イタリア史（ナポリ王国、イタリア統一）、フランス史（クリミア戦争）といった様々な国の大きな歴史的な流れと交差している。報告書のカデルリーもカナダの開拓時代の歴史と関係していると言える。お雇い外国人が日本の近代化に力を貸していたちょうどその頃のカナダの事情が報告書に描かれているが、まだ開拓者時代であり、フロンティアでは小学校が出来ていないのが当然であったようだし、医療施設となると、広い地域に皆無だったようである。土地の測量が終わらず、地図も道路もまだ出来ていない土地へ初期の入植者たちがかなり少数で果敢に出かけて行ったことが報告書のニピシング村の事情から読み取れる。また、フロンティアにおける土地の開墾方法やメープルシュガーの製法についての記述もある。さらに、開拓者時代の入植者の募集がどのようなものだったか、報告書は考えさせる内容をふくんでいる。

なお、報告書はカデルリーの離日後に書かれているので日本についての記述が含まれていることも期待したが、日本についてはまったく触れていない。

1. 経歴不詳、行方不明のお雇い外国人だったカデルリーをめぐって

城岡はこれまでカデルリー関係の論文を3本書いている。城岡（2006）は1871年出版の大学南校（幕府開成所の後身、東京大学の前身）で出版され、静岡県立中央図書館¹⁰に残る2冊のドイツ語教材の内容を検討し、誰が書いたかなどを考察したもので、お雇いドイツ語教師として日本で最初に雇用されたカデルリーと二人めのワグネル（Gottfried Wagener）の可能性を考えた。城岡（2007）は、カデルリーの伝記がスイスのカントン・ベルンの郷土史資料として作成されていることを見つけて¹¹書いたものであるが、それまで不明と言われていた

¹⁰ 莢文庫として残るが、なぜ静岡県立中央図書館に大学南校の教材などが残っているのか、詳細は不明。維新後に出来た静岡学問所も大学南校も幕府の開成所出身者が中心となっているので、両機関のあいだの人的交流が関係していることは推定できる。

¹¹ 伝記は発見したと考えたが、再発見だったようだ。その後、ラウクがプロイセン派遣のホルツについての論文でカデルリーにも触れ、生年や没年をあげ、カデルリーがTravellerであったと述べ

カデルリーの生涯を伝記をもとに明らかにすることができた。貧農に生まれながら、小学校卒業後、農家の下働きから身を起こし、イタリアで傭兵になり、その後家庭教師を経て、クリミア戦争時にはフランス軍の兵站部で働き、家庭教師をしながら、各国を長期滞在しながら放浪し、シベリアを横断して来日し、横浜でお雇い教師として雇われたようである。杳として行方も知れなかったカデルリーが離日後にアメリカ・カナダに渡ったことも判明した。シベリアや日本についての講演をおこなったらしいし、バンクーバー島奥地の地質学調査やオンタリオ州ニピシグ湖沿岸部までの学術調査を行ったことが伝記に書かれていたが、事実なのかどうか判断が付かなかった。カナダで出版された『オンタリオ州のスイス人』にカデルリーについての記載があり、スイス人入植地として確保された土地を調査して、報告書を書いていることが事実であったことを指摘している。三つめの論文の城岡（2008）は、日本の公文書（『公文録』、『太政類典』）や『御雇教師部類』といった明治初年の文献や日本でスイスの外交官から企業家に転身したブレンワルトの未公開の日記などをもとにカデルリーの日本時代について、特に大学南校のドイツ語のお雇い教師時代について明らかにできることをまとめたものである。

2. 伝記、その他の関連文献から報告書について考えてみる

ニピシグ湖沿岸部への調査旅行に触れた部分を前後の記述も含めて伝記から取り出しておこう。「そこから直行したニューヨークには数日滞在しただけで、ナイアガラの滝を見物すると、数週間、オンタリオ湖からエリー湖へ流れる¹²ナイアガラ川¹³で地質学調査に従事し、その後、トロントへ向かい、しばらく滞在した。ここから、カナダのスイス移民とオンタリオ州政府のためにニピシグ湖への学術調査旅行（Erforschungsreise¹⁴）を行なった。ニピシグ湖の南岸と南東岸にある数百平方英マイルの美しい森林と肥沃な耕地は、将来のスイス人入植地として供与されることが政府により約束されていた。」少し奇妙なの

ていることが判明した（RAUCK 1996）。ラウクの指摘はスイス歴史百科事典（HLS）のプロジェクトに先行して、どのようにして伝記にたどりついたのか不明であるが、ベルン伝記集を参考文献にあげている。

¹² 流れる方向が逆。ナイアガラ川はエリー湖からオンタリオ湖に注いでいる。

¹³ ユタ川（Uta）と書いているが、この地域にはナイアガラ川以外にそのような川は存在しないので、ナイアガラ川の間違いと判断した。

¹⁴ 現代ドイツ語では、Forschungsreiseとするのがふつうである。カデルリーの行なった旅行は学術調査のための旅行とは言えないが、そのような扱いで伝記に書かれている。

は、伝記のこの記述では、移民特別担当官のエリーゼ・フォン・ケルバー夫人が出てこないで、彼女から依頼された調査であるのに、カデルリー自身がスイス移民やオンタリオ州政府から、直接、依頼を受けたかのような書き方になっていることである。伝記にはカデルリーの書いた報告書についての注記があり、「当時スイスの雑誌 (Blätter) でも公表されたこの遠征についての彼の報告は、全体として見ると、好意的なものだった。しかし、報告により故国の同胞に移住を促す意図はないことをカデルリーは強調している。報告書の公表を許可したのは、移住のすすめとしてではなく、すでに決定を下しているひとたちへの指針としてなのである」と書いている。カデルリーの死後の1877年にパンフレットの一部として印刷された報告書について当時スイスの雑誌でも公表されたと不正確なことを書いているところを見ると、伝記の著者は報告書自体は読んでいないのだろう。報告書の内容について触れているのは、そういう要約をカデルリーが生前に故郷の誰かに書き送っていたのだと考えられるだろう。カデルリーは出自が知っている故郷の人たちには真っ赤なウソは付けなかったと見えて、さすがに、日本への学術遠征の帰りの鉱物学教授とまでは言っていなかったようで、そのように扱われていない。もし伝記の著者が報告書を読んでいたのなら、Jacques Kaderlyと変名を使い、「鉱物学教授」といつわり、同郷のスイス人農民を引き連れ、調査報告書を書いている行為について好意的な書き方にはならなかったのではないだろうか。

カデルリーがカナダで書いた報告書とは、直接、関係ないが、伝記からの話をもう少し続けよう。そもそもカデルリーはどのような人物だったのだろうか。

伝記のもとになっているのは、城岡 (2007) で書いた通り、カデルリーを直接知っているひとの話以外は、カデルリーが故郷の友人、知人や村の教会の牧師や小学校の恩師に書き送った手紙である。当然、真実そのままではない。カデルリーの場合は、誇張癖があったと考えられ、事実関係が誇張され、自慢話が挿入され、事実関係が歪曲されている。たとえば、伝記には、本稿の冒頭でも触れたが、東京の学校で「自然科学の複数科目の教員として」(als Lehrernaturwissenschaftlicher Fächer) 採用され、国家公務員としての立場のおかげで政府の庇護を受け、「日本の奥地への旅行を何度もしたこと」(mehrere Reisen in's Innere des Insellandes) が書かれているが、大学南校では基本的にドイツ語を教えたはずであるし、カデルリー自身も大学南校で出版したドイツ語教材に「ドイツ語とドイツ文学の教員」(Lehrer der deutschen Sprache und Literatur) という肩書を使っているから、自覚していなかったはずはない。事実とは異な

る内容を故郷に意図的に書き送っていたことは間違いない。また、明治初年は外国人が自由に国内旅行できたわけでもない。日本の公文書で確認できる旅行は、箱根（明治2年12月）、横浜（明治3年11月）、伊豆熱海（明治3年12月）だけである。それも、東京の近郊を湯治や療養のためという目的で旅行できたに過ぎず、日本の奥地への旅行を何度も行ったという言い方は明らかな誇張である¹⁵。さらに、日本滞在中に「地質学上や鉱物学上の実り豊かな成果（die reiche geologische und mineralogische Ausbeute）をあげることができた」と伝記は述べていて、離日時の記述でも、「日本滞在中の最大の成果として1580点もの鉱物、ひょっとしたら日本に存在するすべての鉱物を網羅した鉱物標本の大コレクションを携えて太平洋を渡った。日本政府はこの鉱物標本の買取りを希望したが果たせなかった。」(p.371)とある。日本政府がカデルリーから鉱物標本を買い上げようとしたという記録は国立公文書館の記録にはない。日本の鉱物学はカデルリーが離日してから来日したドイツ人のカール・シュenk（Karl Schenk）により始まったとされているが、その時でさえ、当時の日本には鉱物標本の備えもほとんどなかったとされている。カデルリーが日本の鉱物標本を収集していることに触れている文献もなく、誰か日本人の協力を得て全国の鉱物標本を集めたという可能性もないようである。カデルリーの鉱物標本がすべて日本産だったことは疑わしいが、カデルリーが日本滞在時に鉱物標本を携えていたということは、スイス総領事のブレンワルトの日記のカデルリーの収集した美しい石や鉱物標本についての記録が証明している（1872年2月18日、1872年3月1日）。伝記にはウラルで鉱山総監督の家で家庭教師になり、この地域の主な鉱山を見て回ったことや鉱山学校に出かけたことが書いてあるし、5年間かけてシベリアを横断してから来日しているが、シベリア滞在時の主な関心のひとつが鉱物学だったと書いてあるので、カデルリーの1580点の鉱物標本には、おそらく、来日以前にウラルやシベリアで収集したものがかなり含まれていたと考えるのが自然であろう。カデルリーの鉱物標本の行方であるが、伝記に「カデルリーはサンフランシスコのウッドワード大博物館とのあいだで契約を交わし、鉱物標本を展示用に数年間貸与した」(p.371)とある。このウッドワードの大博物館というのは、城岡（2007、2008）の時点では判明しなかったが、そ

¹⁵ 外国人は遊歩区域以外の内地旅行は自由にできたわけではない。カデルリーは神田にあった教員宿舎を離れて、しばらくの間、築地の外国人居留地の築地ホテル館から大学南校に通ったことが公文書の記録に残されているが、このときは別手組という護衛までホテルから大学南校まで必要だった。なお、同僚だったクニッピンは大学南校の敷地を出るような場合には必ず護衛が付いたと書いている（小関・北村編 1991）。

の後、Woodward's Gardensと言い、サンフランシスコの有名な複合娯楽教養施設で、ホテル、植物園、動物園、博物館などが含まれる大きな施設だったことが分かった。岩倉使節団も1872年1月18日（明治4年12月9日）に訪れている。久米邦武編の『特命全権大使米欧回覧実記』（1878、明11）に「ウードワルト公苑」についての記録があるが、カデルリーがアメリカに向けて出発したのが1872年7月22日だから、サンフランシスコ到着は3週間後、したがって、「日本産の」¹⁶ 鉱物標本の大コレクションをウッドワードガーデンに貸与したのは早くても1872年の夏であるから、『米欧回覧実記』にはカデルリーの鉱物標本については何も書かれていない。しかし、ウッドワードガーデンについて書いているアメリカの文献を探してみると、カデルリーが鉱物標本を貸与したこと自体は事実であったことが判明した。「日本の鉱物のコレクションがあり、日本で収集された最初にしてもっとも完全なコレクションであると言われている。極めて多様で豊かな標本が含まれ、江戸の帝国アカデミーの教員だったジャック・カデルリー教授によって日本各地の島で集められたものである。」（LLOYD 1876：326）。

伝記には書いてないが、カデルリーは、日本の海産貝類研究のパイオニアのドイツ人のリシュケ（C. E. Lischke）に横浜から江の島にかけて採集した約280点の貝類標本を送っている事実が判明した。カデルリーは、鉱物学だけでなく、動物学についても関心と行動力を持っていたようである。ドイツ人のリシュケは市長などを務めながら、来日せずに、日本産貝類の研究を行った民間研究者であり、3巻の研究書『日本の海産貝類』を出版している。トコブシの学名の最初の命名者もリシュケである。カデルリーの名前が含まれた学名をもつ巻貝 *Pleurotoma Kaderleyi* Lischke¹⁷（和名 イグチガイ）があることに城岡はこれまでの調査の過程で気付いたが、お雇い外国人のカデルリーが関係しているのか分からなかった。カデルリーはやや珍しい名前である。『資料御雇外国人』で類似の名前のお雇い外国人はいない。イグチガイの学名を付けたリシュケの研究書にあたってみると、リシュケは第2巻の後書きにこう書いていた。「この巻の印刷が進むあいだに日本の貝類の小包があらたに届いた。規模も大きく、きわ

¹⁶ 諸般の事情を考慮すると日本産は疑わしいと思われるが、すでにウッドワードガーデンもなく、売れそうなものは競売にかけられたとされているので、カデルリーの鉱物コレクションも散逸したと思われるので、確認する方法はなくなっている。

¹⁷ *Kaderleyi*が学術雑誌に発表された時の綴りだが、『日本の海産貝類』第3巻では*Kaderleyi*と表記している。現在は属名が変更されている。また、リシュケは人名由来の献名の種小名には大文字を使っているが、学名における種小名の小文字書きが徹底されたようで、現在は、*Turriculla kaderleyi* (Lischke)と表記される巻貝である。

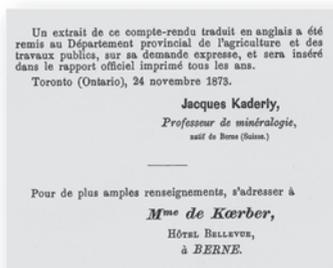
めて貴重なもので、江戸の帝国アカデミーの教師をしているジャック・カデルリー氏が江戸湾（東京湾）、詳しく言えば横浜から湾外の江の島までの間で集めたもので、ニコライエフスク（Nikolajefsk）にいるわたしの友人で枢密商業顧問官のリュードルフ（Lühdorf）¹⁸の取り計らいで送られてきたものである。この約280点の標本を含むコレクションは、この巻では、入手済みの種の記載を補完する場合や修正する場合にだけ110ページ以降で利用することができた。そういう種についてのさらなる補足をここに書いておいてもよいだろう。加えて、小包の中には日本からはじめて送られてきた種があるが、印刷が完成するまでに許された短い時間で確実に新しい種として特定できたものについて簡単に触れておこう。54種である。他に詳しい検討が必要なそれとほぼ同数の貝がある。」（LISCHKE 1871：164）。研究書の第3巻をリシュケは1874年に出していて、カデルリーの名前の付いた巻貝やリュードルフの名前が付いたものが含まれている。動物学上の記載だけで、命名の説明はしていないが、第2巻後書きの内容を考えれば、カデルリーやリュードルフに感謝して、学名をふたりに献名したことは確実だろう。

申請が必要だった国内旅行にしても、箱根や伊豆・熱海への旅行申請をして出かけていることは日本側の資料で確認できることなので、「日本の奥地への旅行を何度も」というのは誇張があるにしてもまったくデタラメを語っているわけではない。誇張癖はあっても、虚言癖というほどではないということだろう。伝記にまとめられた彼のさまざまな体験談も、そのまま、全部、真実ではないにしても、おそらく、もとになる事実はあったのではないかと思う。

¹⁸ 伝記によると、カデルリーはウラルからシベリアを7年程度かけて横断しているが、1868年秋にニコライエフスクにたどりついている。凍結港なので、中国に出発できる春までここに滞在している。リュードルフとカデルリーはこのときに知り合いになったらしい。ところで、リシュケの研究書の第二巻が出た1871年は、当時日本で通用していた和暦に直すと明治3年11月11日から明治4年11月20日になる。公文書の『太政類典』に「南校雇教師独逸人カデルリー病氣ニヨリ横濱へ旅行ス」という件名の明治3年11月付けの記録がある。辯官宛に大学（文部省の前身）が届けたものであるが、「暫時」ということで旅行を認めているが、記録では「病氣ニ付為療養横濱へ罷越度旨願出候處」と説明しているが、病気だから横濱というのは理解しがたい理由である。東京から横濱への旅行は当時の規則に従えば、遊歩区域外への内地旅行に当たるので、本来は許可が必要だろうが、クニッピングによれば、土曜日の午後には横濱に出かけ、日曜日を横濱で過ごすのは、お雇い教師の間ではふつうに行なわれていたことなので、カデルリーの横濱行きは、暫時とはいうが、短いはずはない。カデルリーは南校の退職後に追加報酬を求めて南校や日本政府に1750ドルを要求したが、「二百五十元（昨年末為保養横濱へ参り候ニ付留守中給料引）」と書いて、平均月給の250ドル分を要求額から差し引いているので（城岡 2008：166）、一か月程度は大学南校を休んで横濱に行っていたのではないかと考えられる。この期間を利用して、カデルリーは、病気を口実に、横浜周辺の貝類の採集の段取りを付けたのかもしれない。

3. 報告書の内容の検討

カデルリーの調査旅行がカナダ開拓時代のフロンティアへの旅だったことから報告書の内容について考えておこう。訳出した報告書はドイツのバーデン公国出身の未亡人エリーゼ・フォン・ケルバー男爵夫人がオンタリオ州のニピシング湖周辺へのスイス人の移民推進用のパンフレットの一部分として出版したものである。夫人は、カナダで建築・土木関係の仕事をしていた夫の死後、夫の仕事を通じて知った移住優遇措置の利点に注目して、スイスやドイツからの移住のあっせん活動を積極的に進めた女性である。1872年にカナダ連邦政府の移民特別担当官に任命されている。1875年末までに主にスイス人からなる400人の移民をカナダに送り込んだと言われている (MAGEE 1991 : 90)。夫が死亡してやむを得ない理由があったようだが、女性の社会進出という点では早い例であり、精力的に活動した女性であったが、役所との交渉においては手続きや役所の序列や権限を無視するところもあったようで、そのため敵も作ったようである。また、他の移民特別担当官との綱引きなどもあったようで、最後は、彼女の抵抗にかかわらず、移民特別担当官の契約は更新されず¹⁹、移民あっせん活動に投入した私費を回収しようという運動も功を奏せず、多額の借金を抱え、1881年頃にカナダを離れ、その4年後にロンドンのホテルで自殺というさびしい結末で人生を終わらせたひとであった (ROXROY 1978 : 28-43, MAGEE 1991 : 110)。フォン・ケルバー夫人はいわゆる開拓民だけでなく、時計職人をカナダに送り込み、独身女性をメイドとして、また看護師や孤児²⁰の送り込みも積極的に進めたい。マグネタワン(Magnetawan)村からニピシング湖周辺までをスイス人入植者に割り当てようという計画は夫人が進めた企画だった。オンタリオ州の農



報告末尾のカデルリーの署名とパンフレット末尾のド・ケルベール夫人(フォン・ケルバー夫人)の署名

¹⁹ ROXROY (1978 : 42) は、リベラルなマッケンジー (Mackenzie) 政権から保守派のマクドナルド (Macdonald) 政権へと変わる中で、経費削減の結果だと推定している。

²⁰ *The Little Immigrants* (Kenneth Bagnell, 新版、Toronto: Dundurn, 2001) によると、安価な労働力として受け入れられた子供たちは、往々にしてまったく学校にも通えず、受け入れ後の監視保護体制も皆無に近く、いつのまにか行方不明になる子供たちも多かったらしい。

業大臣とのあいだでスイス人入植地としての土地の確保の交渉をまとめている。カデルリーは夫人の依頼を受け、ニピシグ湖南東岸の土地を中心に探検・調査を行い、移民推進が目的の報告書を書いたわけである。費用は「オンタリオ州の農業担当課と公共土木工事担当課がこの探索の費用を引き受けると申し出た」と報告書にあり、州政府から出たようである。パンフレット末尾の画像には、報告書は調査の直後に書かれたものらしく、原稿提出の1873年11月24日の日付が入っているが、パンフレット自体は、4年後のカデルリー没後の1877年にスイスのベルンで出版されている。カデルリーの報告書の末尾に続いてパンフレット全体の最後の部分が来ているが、フォン・ケルバー夫人はカナダ移民の説明会のようなものを開催して、配布したものらしく、夫人の滞在ホテルとしてベルンの高級ホテルのホテル・ベルビューが連絡先としてあげられている。MAGEE (1991:86)によると、フォン・ケルバー夫人自身はカデルリーの現地調査の時点ではニピシグ村には行っておらず、1874年春にニピシグを訪れている。この旅行はカデルリーの報告の内容を検証するためのものだったという。夫人はいったい何を検証したのだろうか。カデルリーの報告書は地名や人名の扱いがいい加減で、間違いが多く含まれている。はじめての土地の地名で口承地名も多いフロンティアの地名や初めて会った人の名前が不正確なのは仕方のない面もあっただろう。しかし、入植予定地の宣伝という意味から言っても最重要項目であるはずの土地の面積の単位にポーズ (pose, poses) という意味不明のおそらくデタラメ語が使われているのに、フォン・ケルバー夫人がこれも訂正していないというのは、かなり杜撰なやり方と言ってよいだろう。報告書の一部の英訳²¹がカナダ農務省 (1880)に残されていて、報告書でposeと書かれているところはエーカー (acre) が使われている。カデルリーはエーカーがフランス語に訳せなかったため (そのままacreを使えばよかったように思うが) 200 posesの土地だとか、1 pose当たりの収穫がどのくらいなどと述べているのだと考えられる。カデルリーが報告書を書いてからフォン・ケルバー夫人がパンフレットを出版するまで4年間もあったわけであるから、内容の間違いや不都合を修正する時間は十分にあったはずである。

ところで、パンフレット末尾でカデルリーはJacques Kaderlyと署名している。スイスでの本名はJakob Kaderliであることが伝記から分かっている。日本では彼の主著である『カデルリー文典』にJakob Kaderlyと、姓の末尾を少し変えて、

²¹ カデルリー自身の手になる英訳なのか、誰か別のひとが英訳したのかは分からない。

署名しているし、そういう名前だと考えられてきた。Jacquesについては、Jakobのフランス語の対応名であるが、フランス語の報告書に合わせたわけではなく、離日後にまずサンフランシスコに渡っているが、ここでもJacques Kaderlyを使っていることがウッドワードガーデンのカデルリーの鉱物見本についての記述から分かっている。実は、日本時代にもドイツの貝類学者リシュケとの文通にJacques Kaderlyを使っていた (LISCHKE 1871: 164)。カデルリーには実名を少しだけ変える変名趣味があったことは間違いない。なお、エリーゼ・フォン・ケルバー夫人もパンフレットでは自分の名前をフランス語式に訳して、エリーズ・ドゥ・ケルベールと署名している。カデルリーの場合、おかしいのは名前だけではない。名前の下に書いている肩書や出身地の記述もおかしい。スイスのベルン出身というのも正確にはカントン・ベルンの寒村リンパハ (Limpach) 出身なので正しくないが、それぐらいは目をつぶるとしても、Professeur de minéralogieと書いているが、これでは鉱物学教授ということになってしまう。もっともフランス語ではprofesseurは「教師」に近い意味で、広く使われる語のようであるが、カデルリーがカナダで周囲にしていた説明は「鉱物学担当教員」のような控えめな内容ではなかったようである。マギー (MAGEE 1991: 84-85) がカデルリーのことを日本への学術遠征 (a scientific expedition to Japan) から戻る著名な科学者で旅行家 (the distinguished scientist and traveller) と書いているのは、未見であるが、おそらく、そういう内容がカナダ側の資料に残っているものと思われる。

さて、移民宣伝用のパンフレットがフランス語で作られ、ドイツ語圏スイス出身のカデルリーがフランス語で報告書を書いた理由を推定してみよう。まず考えられるのは、パリーサウンド地区がセントローレンス川からオタワ川を経て、フランス語圏のケベック州からも比較的容易に到達でき、フランス語圏のひとつにとっても都合のよい地域にあったことである。また、フォン・ケルバー夫人自身はドイツ出身であるし、カデルリーとニピシング湖周辺の調査にカデルリーに同行した農民3人はすべてスイスのドイツ語圏出身なので、ドイツ語圏について人口の多いフランス語圏への宣伝活動の必要性があったことが考えられるだろう。

ところで、正規の学校教育としては、リンパハ村の学校 (つまり小学校) しか卒業していないカデルリーはどこでフランス語を学習したのだろうか。伝記の著者が想定していたようにカデルリーには語学の才能があったらしい。日本語ができたかどうかは不明であるが²²、伝記によると、旅先で次々に外国語を

習得し、フランス語、英語、トルコ語、ロシア語を学習している。フランス語の場合は、いつとは特定できないが、リンパハ村で農家の下働きをしていたカデルリーは、そのうちにフランス語圏のカントン・ヴォー²³に出稼ぎに出かけている。夜間、学校に通い、フランス語を学習し、かなり上達したことが伝記に書かれている。また、のちにクリミア戦争ではフランス軍で働いたとのことで、こういう機会にフランス語の力を付けたのではないかと考えられる。また、日本では、南校解雇後に横浜の藍謝堂（高島学校）で半年間ドイツ語とフランス語を教えたとされている。



カデルリーが訪問したニピシング村の有力開拓者のジョン・ビーティー氏の墓（2010年撮影）

1872年にニピシング湖周辺へ探検旅行ができたことから報告書の内容を読み取っていき。当時、マスコーカ地区とパリーサウンド地区は移民の受け入れを推し進めていたが、パリーサウンド地区の北端に位置するニピシング村（と便宜的に呼んでおく）は、厳密に言えばまだ成立しておらず、定住者はまだ数家族という状態で、カデルリーは報告書で「私たちはビーティー氏の家に泊まったのだが、彼は6、7人いるこの村の開拓民の中で一番裕福であった」と書いている。現在のニピシング村はタウンシップという形態であるが、自治体として成立するのは1888年で、カデルリーの探検旅行から15年もあとのことである。村史²⁴ではニピシング・ロッソー道路が1874年までにジョン・ビーティー氏の農場まで開通し、これをタウンシップの始まりと書いている。村史は開拓者時代からの歴史を略述しているが、1862年か1863年に最初にこの地にやってきた開拓者がジョン・ビーティー氏とエドワード・フロイド（Edward Floyd）氏とジョン・ジェサップ（John Jessup）氏の三人だったようで、オタワ方面のレンフルー（Renflew）・カウンティーのイーガンヴィル（Eganville）からやってき

²² ロシア語のできるひとが当時の日本の外務省にいなかったためロシア語文書を日本語に翻訳をしたとカデルリーが述べている書簡が公文書に記録されている。「外務省ノ為メ魯西亜ヨリ来レル種々ノ公書類ヲ日本語ニ反譯イタシ候事」（『公文録』、『太政類典』）。しかし、カデルリー文典やその他のカデルリーが作成したと考えられるドイツ語教材は日本語をまったく使っていないし、日本語学習歴があったとも考えられないため、日本語の能力は疑わしい。

²³ フランス語でCanton de Vaud、ドイツ語ではKanton Waadt。州都はローザンヌ（Lausanne）。

²⁴ Township of Nipissing（1974）の『ニピシング・タウンシップの開拓時代』（*Pioneer Days in the Township of Nipissing*）。本稿で村史と言えばこれを指している。

たのだという。ペムブローク（Pembroke）からはカヌーでオタワ川、マワタ川を経て、ニピシグ湖南岸のサウスリバー河口付近に辿りついたらしい。三人はいったんイーガンヴィルに戻ったが、翌年、ビーティー氏は妻²⁵と子供を二人連れて移住してきたらしい。馬とそりを使い、凍結したニピシグ湖を渡る際には氷が割れ、乳児を抱えた、ジョン・ビーティー夫人が水中に転落するなど、容易な旅ではなかったらしい。1863年から1864年ということなので、最初の定住者のジョン・ビーティー一家がこの辺りに居住を始めたのはカデルリーの訪問の10年ほど前に過ぎず、アメリカインディアンのみばらな存在はあったであろうが、欧州系住民にとっては、手つかずの自然が残された土地であり、まったくの未開拓地であったと言える。村史ではパイオニア時代の入植者としてゲルバー家（the Gerber Family）やアームストロング家（the Armstrong Family）も記述しているが、移住してきたのは1879年と1876年であり、カデルリーのニピシグ村訪問のあとである。

当時、ニピシグ村までのロッソー・ニピシグ・コロナイゼーション道路の完成が急がれていたが、まだ未完で、完成直前という状態だった。報告書にニピシグ村まで通行できるのは冬期に限られると記述しているところから考えると、湿地帯や湖沼が凍結するか、干あがる必要があったものと考えられる。

1871年にオンタリオ州マスコーカ地区のブレイスブリッジ（Bracebridge）で出版されたマスコーカ地区とパリーサウンド地区についての本（MCMURRAY 1871）がある。この頃の両地区は、土地の無償供与で広く移民を募っていて、開拓地無償供与地区（the free grant districts）と呼ばれている。当時のオンタリオ州では、アメリカ合衆国のホームステッド法にな



地図が無い土地が広がる1871年当時のオンタリオ州パリーサウンド地区北部

²⁵ イーガンヴィルの地質学者ジョン・マクマレンの娘でエリザベス・マクマレン・ビーティー。イーガンヴィルから3人の男性がこの地域の最初の開拓者として入植していること、しかも、そのうちの2人はマクマレンの娘たちと結婚していることから、村史は、ジョン・マクマレンが地質調査の過程でこの地域が有望であることを確信し、そのことを娘や婿に伝えたのではないかと推定している。また、1876年にはトマス・ネスビット・アームストロングがやはりイーガンヴィルから移住しているが、彼の妻メアリー・マクマレンもジョン・マクマレンの娘なので、ジョン・マクマレンは3人の娘を開拓が始まったばかりのニピシグ村に嫁がせているようである。

らい、開拓者には土地を無償供与するなどの条件を取り入れていたようだが、その条件はこの本の巻末の鉄道会社（Northern Railway of Canada）の広告によると、「戸主は移住を条件として200エーカーの土地を無償で得ることができ、その他の18歳以上の家族の分として男女を問わず100エーカーの土地を無償で得ることができる。」のようになっていたらしい。土地が無償供与される条件は、やはり、ホームステッド法に習い、年限内に一定の面積の土地の開拓をして、家を建てることなどであった。この本には、農地の無償供与を受けて、開拓農民として成功するためのポイントがまとめられているが、巻末には当時の地図が掲載されている。マスコーカ地区はいちおう地図らしき状態であるが、驚くべきことに、同じように開拓農民を募っているパリーサウンド地区は、集落名というよりは区画に名称を付けただけなのかもしれないが、区画に名称が付いているのは南部地区に限られている。区画名が書かれている部分を目で追っていくと、西端にはヒューロン湖のジョージア湾に面しているパリーサウンド村（パリーサウンド地区の中心集落）やパリー・アイランド島が描かれている。

地図の上端にはL. NIPISSINGというニピシング湖を指す文字が見え、ニピシング湖の一部が描かれているが、ニピシング湖の南側には白紙が広がり、区画名もなく、サウスリバーは描かれているが、他の河川湖沼も地図上に存在しない。カデルリーが報告書で触れているニピシング村、マグネタワン村、コマンド川、レスツール湖など地図にはまったく描かれていない。地図上にはUNSURVEYED TERRITORY（測量の終わっていない区域）と書かれていることが地図の無い世界を示している。パリーサウンド地区の南部にNippissing Roadと書かれている道路が描かれているが、パリーサウンド村の北西にある小さな湖までしか書かれていない。ここはカデルリーの報告書にも出てきて、フォン・ケルバー夫人が推進したスイス人入植地の南限であるマグネタワン村（当時、村としての実体があったわけではないが）がある場所である。

カデルリーがニピシング湖周辺までの探検旅行をしたのはこの本が出た2年後である。また、パリーサウンド地区のニピシング村について、英語版Wikipediaは1874年から1881年にかけて村の測量が行なわれたと書いているし、村史は最初の測量はHenry Lilleが行なったが、作られた地図の日付は1874年4月18日だと述べている。ということは、カデルリーがニピシング湖東南岸のジョン・ビーティー氏の農場を訪れた1873年はこの辺りの土地の測量も終わっていなかったということになる。

さて、報告書からトロントからニピシング村に到着するまでの旅程を拾って

みると、以下のようになる。6日間²⁶かかっている。

- 1日め トロントを午後出発。オリリア（汽車の終点）まで行き、宿泊。
- 2日め ワシヤゴ（マスコーカ地域を横断する鉄道の終点）まで行き、翌日の午後到着。ワシヤゴまでの鉄道は汽車ではなく、馬車鉄道だったのであるか。ワシヤゴから駅馬車に乗り換え、14マイル北上。晩にはグレーヴンハーストに到着、宿泊。
- 3日め 蒸気船で4時間かけヘルムスリー（現代のロッソー、トロントから156マイル地点）に向かう。ヘルムスリーで馬に乗り換える。モンテスに到着、宿泊。
- 4日め マグネタワン到着、宿泊。
- 5日め コマンダ川の河岸にある漁師用の小屋で宿泊。
- 6日め 午後に目的地のニピシング湖南東岸のビーティー氏の農場に到着。

現代ならニピシング湖北岸のノースベイ（North Bay）市までオンタリオ・ノースランド交通（Ontario Northland）のバスを使えば、途中経路の違いにより必要時間は変わるが、5時間程度から6時間弱で到着できる。カデルリーがニピシング村を訪問した時代と比べて、道路が整備され、交通が発展したことは間違いない。とはいえ、公共交通機関の衰退も顕著である。現在、人口5万人を超えるニピシング湖沿岸の最大都市ノースベイ市からニピシング村へ行くとしても一切の公共交通機関が欠如していて、船もバスも電車もない。ニピシング村から最寄りのバス停²⁷はポワソン（Poisson）村にあるが、道路標識によればニピシング村から15キロ離れている。

報告書でカデルリーはニピシング村を流れるサウスリバーについて、鉄分を含み濁った水が二つの滝の間ではほとんど流れず、水面が鏡面のようになっていて、周りの樹木を幻想的に映し出し、カヌーで旅すると樹木の上を旅しているかのような不思議な気にさせられると書いた。写真で分かるように、現代で

²⁶ MAGEE (1991 : 85) は、報告書とは別の資料によるのか、ソリで出発して4日後に到着したとしている。

²⁷ 長距離バスのバス停で、トロントへ行くものも、ノースベイへ行くものも夜行が1便、日中のものが2便走っているだけだった（2010年時点）。

も二つの滝のあいだでは水はほとんど流れず、ガラスのように平らな水面は、水質のためか、鏡のように反射していて、覆いかぶさるように群生している樹木が青空とともに水面下のようにも見え、幻想的な雰囲気を作り出していた。

変わらなかったのはサウスリバーだけではない。村は、一時期は蒸気船の港としてニピシグ湖周辺の発展の中心になる可能性はあったが、鉄道の時代になると、鉄道が通り、駅が作られたのはニピシグ村ではなかった。ニピシグ湖北岸のキャランダー（Callander）に駅ができ、カナダの大陸横断鉄道はニピシグ湖北岸のノースベイ市を大きく発展させ、ニピシグ村は発展から取り残されてしまった。



現代のサウスリバー（2010年撮影）

カデルリーは、ニピシグ村及びその周辺が将来大いに発展するだろうと書いているが、実際は、ほとんど発展しないまま一世紀以上が経過している。ニピシグ村が発展しなかった理由や入植者獲得のためのウソについて考えてみよう。気になるのは次の三つの点である。ひとつずつ、検討しておきたい。

① 開拓地の将来性 ② 冬期の低温 ③ 無医村問題

一時期ピーティー氏が飼料を高値で販売できたことが報告書にあるが、馬を輸送に使う林業開発が周辺の農地の開拓に先行し、飼料を運ぶ交通の未発達のおかげであったと思われる。一時的な現象であるとカデルリーには予想できなかったのだろうか。現在の村の農業経営は、道路沿いとなり村のポワサンまで歩いてみたが、干し草作りを行なっている農場は見かけたが、他には、薪（Firewood）を販売するという立て札を見かけただけで、野菜を作っている畑は一か所見かけた程度であった。農地の多角的経営が行なわれているとは思えなかった。

カデルリーは報告書の中でこの地の気候がスイス北西部とよく似ていると述べ、レマン湖、ヌシャテル湖、ライン川北部で栽培されているような早生のブドウ栽培を試してみるべきだという意見を述べている。スイス北西部というのは、ワインの生産地であるヌシャテルのあたりを考えていると思われるが、気候が似ているというのは何を言っているのだろうか。冬の最低気温についてはあとで詳しくみるが、温暖なスイス北西部と似ているところはなく、まったくの

ウソであるし、現在、このあたりでブドウもワインも生産されていないことも確かである。ワインの生産はカナダの中では比較的温暖な土地で始まったらしい。トロントの観光名所カーサ・ローマ内の説明板には、カナダ最初の商業ワイナリーはエリー湖北岸にあるペレー島に1866年にできたもので、19世紀末には35のワイナリーがオンタリオ州にあったが、そのほとんどはエセックス・カウンティー（カナダ最南端にあり、ペレー島も含まれる）にあったと述べている。現在、オンタリオワインの生産の中心はナイアガラ・オン・ザ・レイクを中心としたナイアガラ地方である。カデルリーがニピシング村でのブドウ生産の可能性について述べたのがペレー島などにワイナリーができれば始めていたことをふまえていた可能性がある。しかし、ペレー島にしてもナイアガラ地方にしてもオンタリオ州南部で、ニピシング村よりはるかに温暖な地域である。

後のニピシング村についての予想がまったく当たらなかったのは、農・工業の立地条件の変化や鉄道が村を通らなかったことの影響が大きく、意図的なウソだったとは思われない。カデルリーは、ニピシング村やその周辺の土地について、耕作地として「森の大部分は少しずつ消えていき、多くの年月を経て、とうとう岩石だらけの土地しか森に残っていなくなるまで消え続ける。」と述べている。さらに、水力の利用の可能性を予想して、「サウスリバーとコマンダという二つの川は、新しい入植地に注いでいる。この二つの川は工業にとって重要な動力源となる。私は今から四半世紀の間に、製鉄所と工場の煙突が今とは別の光景を見せ、まったく現状とは異なった様相を呈するだろうと予想している。そしてどんな滝の轟音でさえも、あわただしいハンマーを打つ音でかき消され、その音が処女林の中をこだますることはもうないだろう。」と書いている。サウスリバーの動力源ということでは、その後、水力発電所が作られ、一時、ニピシング村の発展の可能性があったことは確かである。何かの工場もしばらくは発電所の近くに存在したらしい。この地域の最初の発電所で、ノースベイ市の電力もまかなったことが村史に書かれている。しかし、わずかの水力発電が村の発展の可能性を意味したのは、大量電力消費時代以前のほんの一時期だったようである。カデルリーが人口増加と発展を本当に予想したのか、それとも、移民募集のためのウソを付いただけだったのか、判断するのは難しいが、移民募集を推進する報告書を書いた他の人物も同じようなことを書いていることは指摘しておきたい。ハーン（Otto Hahn）は、カデルリーの5年後にニピシング湖の沿岸部を実地調査して、報告書を書いている。「この良質の土地は人口が勢いよく増えるだろう。5年前には人間が誰も歩いていなかった場所

であるが、現在、何百もの居所ができています。10年後にはニピシング湖の湖岸地帯はボーデン湖のそれとほとんど同じようになっているとわたしが言っても、間違った判断では絶対ないだろう。」(HAHN 1878: 14)。

次に冬期の低温についての記述であるが、カデルリーの気温についての説明はきわめて悪質である。この地域は冬が寒い。寒い地域にヨーロッパからの移民を募集しようとしていたわけである。カデルリーは「この気候は緯度46度の他の地域と比較すると、並外れて温暖である」と述べている。北緯45度から47度に位置するヨーロッパの都市はスイスの諸都市がだいたいこの緯度にある。マイクロソフトの運営するmsn天気予報²⁸から最低気温の月間平均最低気温が年間で最低になる場合の気温を添えてあげると、南からジュネーブ(-1°C)、モントルー(-2°C)、ローザンヌ(-2°C)、フリブール(-3°C)、ベルン(-3°C)、ヌシャテル(0°C)などがある。フランスならリヨン(0°C)、イタリアならトリノ(1°C)やミラノ(-1°C)である。地球上の各地の気温は、同一緯度でも暖流などの影響もあり、たとえば、ヨーロッパよりも東アジアや日本では寒いことが知られているが、カデルリーは「異なる緯度を通っていたとしても、同じような気候状態の等温線を示すことがある」という、それ自体は正しい説明をして、報告書を読むであろう者の理解力を幻惑し、事実と正反対の主張を押し通そうとしている。事実、ヨーロッパと同緯度の諸都市とは比べ物にならない位にこの地は寒いのである。岩倉使節団の『米欧回覧実記』(久米邦武編)を読むと、当時の日本人にさえヨーロッパが温暖であることが理解されていて、「欧州ノ気候ハ、緯度ノ割ニテ論スルニ、他ノ諸洲ヨリ甚タ温和ナリ」(第九十一巻)と書いて、暖流の影響を受けて、寒流の影響を受けにくいことや偏西風のことなどを理由として述べているのだが、その温暖なヨーロッパからの移民の受け入れがウソの宣伝で行なわれていたのである。カデルリーは報告書の別の箇所で、「カナダのいくつかの地域の気候、とりわけ新しい入植地の気候はスイス北西部のそれと大変よく似ている。」とも書いていて、ブドウ栽培の可能性に言及している。次の表は、msn天気予報のデータをもとに、ニピシング湖南東岸とスイス北西部でワインの産地になっているヌシャテル市の年間平均気温と比較したものである。ニピシング村のデータはmsn天気予報にないので、隣接のポワサン村のデータを使っている。

²⁸ ヨーロッパはFORECA提供データで、カナダのものはiMap提供データとある。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
ヌシャテル (スイス)	最高	3°C	5°C	10°C	14°C	19°C	22°C	25°C	25°C	20°C	14°C	7°C	4°C
	最低	0°C	0°C	3°C	6°C	10°C	13°C	16°C	15°C	12°C	9°C	4°C	1°C
ポワサン (カナダ)	最高	-7°C	-5°C	1°C	9°C	17°C	22°C	24°C	22°C	17°C	10°C	2°C	-4°C
	最低	-17°C	-15°C	-9°C	-1°C	6°C	11°C	14°C	13°C	8°C	2°C	-5°C	-12°C

ニピシング村に隣接するポワサン村とスイス北西部のヌシャテルの年間平均気温

ポワサン村の冬期の平均最低気温が最も低くなるのは1月の-17°Cである。カデルリーは、オンタリオ州南部の「オンタリオ湖沿岸よりさらに少し暖かくさえある」とも書き、南のオンタリオ湖沿岸よりも北のこの地が温暖であるなどと、あり得ない主張までしているが、同一大陸内で遮る高山もない南北でそんな逆転が起こるはずもなく、まったくのウソである。オンタリオ湖沿岸のトロントの1月の平均最低気温は-8°C、キングストンが-12°Cであり、オンタリオ州北部にあるニピシング村などよりいくらか温暖である。

気温について、データを出さずに間違った記載を意図的にしていると思われる点は弁解の余地はないが、冬期の低温問題はカナダ移民の宣伝活動を行う上では鬼門の一つであったのだろう。カナダ側の依頼で報告書を書いた弁護士ハーンも具体的な温度はあげずに、冬の気温についてはアメリカ合衆国と同様にfrischであるとだけ述べ、4月の始めより長く冬が続くことはないと言っている（HAHN 1878：12）。ドイツ語のfrischは、「少し寒い」や「ひんやりとした」という意味である。入植地の記述では文字通り受け取るひとはほとんどいないとしても、誠実で正直な書き方とは言えない。

問題のある記述の三つめが開拓時代の開拓地の無医村問題の記述である。カデルリーは「この地方の気候はとても健康に良いのでここでは病気になるケースはとても珍しく、医者や薬に頼るのはせいぜい外傷のときぐらいだ」と書いているが、健康に良い気候という主張は、医者が皆無ということに対する合理化があると思われる。MCMURRAY（1871：127）でも、健康にいい土地なので事故でもなければ医者が必要なことはほとんどないという、信じがたい説明をしているので、カデルリーの説明と似たりよったりである。ハーン（HAHN 1878：14）の説明も「もっとも強調しておかなければならないのは、この土地の桁はずれの健康さである。医者はいない。なぜならここでは何もすることがないからだ。」で、移民募集をすすめる目的ということを考えないなら、許され

ないたぐいのかなりいい加減なものである。なお、ハーンはこの著書でカナダ政府にうまく取り入ることに成功したようで、フォン・ケルバー夫人が移民特別担当官の再任を拒否されたあと、夫人に代わって移民特別担当官になった人である。出身地のドイツのシュバーベン地方からの移民のあっせんをとくに行っていたようである。

無医村問題にしても、フロンティアの開拓を志すようなひとたちなら、医療が受けられない覚悟があっただろう。とはいえ、無医村ということはやはり大変なことだったようである。村史はニピシング村でエドワード・フロイド氏が1874年に重病になったときのことを書いている。この地域には医療施設が皆無のため数人のインディアンがカヌーでペムブロークまで運ぶことになったらしい。ペムブロークはオタワ川の途中にあり、ニピシング村とオタワまでの中間地点よりはオタワ寄りにあり、200キロ以上離れているが、ここまで行かないと医療施設はなかったようだ。ちょっとした怪我をしても医者に頼ることができなかったのが当時のフロンティアの実情だったらしい。結局、重病のフロイド氏は途中のマタワ（ニピシング村から直線距離で60キロ以上は離れている）で死んでしまったことと、マタワまでの移動自体が容易ではないため、妻のフロイド夫人がマタワに到着したときには、氏が死去して、埋葬されたあとだったことも書いている。なお、この、夫と死に別れ、死に目にも会えなかったフロイド夫人であるが、のちに別の男性と結婚しているが、村の有能な看護師役や産婆役を務めた女性たちのひとりであったとも村史は書いている。フロンティアでは、役割分担で看護師役のようなひとたちが決まり、医者や医療機関の欠如と戦っていたのだろう。

カデルリーは開拓地の問題の指摘として学校問題についても触れている。子供の教育の問題はフロンティアの開拓時代には常に問題になりそうだが、カデルリーは集団移住を勧めていて、「入植地に1つの家族だけしかいないということが生じた場合、子供たちは学校教育を受けられないままになってしまうのだ。というのも政府は、頻繁に通学する十分な数の子供がいる町にしか、無償の学校を設置しないからである。そもそも、2、3家族のために教師にかかる経費を維持するのはあまりにも費用がかかりすぎるのだろう。」と述べている。村史によると最初の学校は1873年と1876年の間に設立されたらしい。なお、最初の生徒の多くはインディアンの子供だったらしい。ということは、カデルリーがビーティー家を訪問した1873年秋にはこの学校が出来ていたかもしれないが、まだ出来ていなかったかもしれない。ビーティー家には6人の子供たちがいた

とカデルリーは報告書に書いているが、学校には通っていなかった可能性もあるわけだ。

カデルリーの調査は、報告書では1873年10月と11月の探検旅行とあいまいにされているが、MAGEE (1991 : 85) によれば、11月3日出発だという。いずれにしても、報告書の日付は11月24日になっており、数週間でききあげられたことは間違いない。記述の間違ひが見られるのはそのためもあるだろう。また、フランス語の母語話者でなかったための語学的な間違ひが見られるが、内容については、経歴詐称によって依頼を受けたものであったとしても、極端な問題点は見られない。冬期の低気温を温暖だと言いくるめている点は批判されて当然ではあるが、同じようにカナダ側の依頼を受けて調査報告書を書いたハーン(1878)も非常にあいまいな記述をしている点を考えると、カデルリーの記述は、悪質ではあるが、この時代のこういうタイプの報告書では、移民に完全に反対するような立場はとれなかったと思われる。その意味では、冬季を中心にした低温について明確な記述をしないのは移民募集側の宣伝に典型的な書き方だったと言えるかもしれない。

MAGEE (1991 : 87-88) によると、スイス人入植候補地にはひどいブユ(black flies) がいて入植者を苦しめ、そのために入植地を放棄するものも出たほどだったらしいが、カデルリーの報告書は吸血ブユについて何も書いていない。飢餓の危険さえあった冬期の食糧確保の問題についても触れていない。とはいえ、調査報告が入植者を募る宣伝目的でなされたものであることを考えれば、語るべきことが語られないのもやむを得ないことだったと言えるかもしれない。日本でもドミニカ移民推進時に日本政府が事実とは異なる情報を使って移民募集をしているのが1950年代ということを考えると、移民を募集する側が入植地を美辞麗句で飾りたて、事実を多少歪曲するのは、広く見られる宣伝方法だとも言えるだろう。

【参考文献】(本文や注で明記したものを除く)

[欧文]

Brennwald, Caspar: *Tagebuch*. (日記)、タイプ原稿、Archiv DKH (Zürich).

Cumberland, Barlow (1886): *The Northern lakes of Canada*. 2nd Edition, Toronto (Hunter, Rose & Co., Printers).

Department of Agriculture (1880): *Information for intending settlers: Muskoka and*

Lake Nipissing districts.

- Hahn, Otto (1878): *Canada. Meine Reise an den Nipissing (Ontario) und die Schweizercolonie.* Reutlingen (Carl Rupp).
- Hamilton, W. E. (1879): *Guide Book & Atlas of Muskoka and Parry Sound districts.* Tronto (H. R. Page & Co.).
- Lischke, C.E. (1871): *Japanische Meeres-Conchylien : ein Beitrag zur Kenntniss der Mollusken Japan's mit besonderer Rücksicht auf die geologische Verbreitung der selben.* 2. Teil, Cassel (T. Fischer).
- Lloyd, Benjamin E. (1876): *Lights and shades in San Francisco.* San Francisco (A.L. Bancroft).
- Magee, Joan (1991): *The Swiss in Ontario.* Windsor, Ontario (Electa Books).
- McMurray, Thomas (1871): *The free grant lands of Canada : from practical experience of bush farming in the free grant districts of Muskoka and Parry Sound.* Bracebridge.
- Meißner, Kurt (1961): *Deutsche in Japan 1639-1960.* Tokyo (O.A.G.).
- Rauck, Michael (1996): "Victor Holtz and the 'German School' in Tōkyō." *Okayama-Daigaku- Keizaigakkai-Zasshi*, 28(2), 99-120.
- Roxroy, West (1978): *Swiss Immigration into Western Canada 1870-1930.* M.A. Thesis, University of Ottawa.
- Smith, John Wallace (1990): "The Swiss Move to Parry Sound District." *Newsletter.* 6 (2), Muskoka Parry Sound Genealogy Group.
- Stiftung Historisches Lexikon der Schweiz (2002-): *Historisches Lexikon der Schweiz* (HLS).
- Township of Nipissing (1974): *Pioneer Days in the Township of Nipissing.*
- Walther, A. (1898): „Jakob Kaderli. 1827 -1874.“ (*Sammlung bernischer Biographien.* 3. Band, hrsg. von dem historischen Verein des Kantons Bern. Bern, 363-376.

[和文]

- 小関恒雄・北村智明訳編 (1991)、『クニッピングの明治日本回想記』、玄同社。
Aufzeichnungen aus meinem Leben für die Kinder und Enkel (「子供と孫のための自伝」という題名の未公刊の自伝の編訳である。
- 上村直己 (1985)、「最初のお雇い独語教師 大学南校教師カデルリー」、『日本古書通信』50巻4号、3 - 5。

- 上村直己（1985）、「明治初年の東京のドイツ語塾について」、『熊本大学教養部紀要』（外国語・外国文学編）20号、43-63。
- 城岡啓二（2006）、「1871年刊行の大学南校のドイツ語教材について」、『人文論集』57号の1、静岡大学人文学部、67-106。
- 城岡啓二（2007）、「日本最初のドイツ語お雇い教師カデルリー（1827-1874）というひと—スイスの貧農の生まれ、傭兵、家庭教師、冒険旅行家、「鉱物学教授」—」、『人文論集』57号の2、静岡大学人文学部、151-196。
- 城岡啓二（2008）、「お雇いドイツ語教師カデルリーの日本時代について—採用から退職、そして離日までの日々—」、『人文論集』58号の2、静岡大学人文学部、151-193。
- ミュルレル、レオポルト（1975、原著は1888）、『東京-医学』、石橋長英・小川鼎三・今井正訳、日本国際医学協会、非売品。
- 山岸光宣（1937）、『学窓夜話』、東苑書房。
- 山岸光宣（1937）、「大学南校と独逸学」、『学燈』41巻1号、2-5。
- 山岸光宣（1939）、「日本に於ける独逸語研究の沿革」、『独逸文学』第三年第三号、171-191。
- 山岸光宣（1939）、「大学南校文書の独逸学関係事項」、『書物展望』9巻5号、384-388。
- ユネスコ（1975）、『資料御雇外国人』、ユネスコ東アジア文化研究センター編、小学館。

【カデルリーの報告書の全訳】

報告

カナダのオンタリオ州北部にある、
ニピシング湖南東部沿岸地域における探検旅行
(1873年、10月及び11月)
エリーズ・ドゥ・ケルベール夫人による出版
カナダ自治領オタワにおける農業大臣承認

ナイアガラとワールプール (Whirlpool) の大滝²⁹そしてそこに連なる山々³⁰は、地質学的に見て豊かな地域であり、これらは美しい川の切り立った岸辺に面して広がっている。その川はオンタリオ (Ontario) 湖からエリー (Erié) 湖に流れていく³¹途中で旅人の目にとまる。私はその近くでの数週間の滞在の後、カナダの大地と面したトロントに2時間半かけて下っていくために、ルイストン (Lewiston)³²で蒸気船に乗り込んだ。このカナダの大地が、1年半にわたる私の土地探索の地となることだろう³³。到着するとすぐに私は、将来スイス人を移住させるために、オンタリオ州政府が数十平方マイルの領土を準備しているという情報を得た。その土地は、この州の北に位置し、ニピシング (Nipissing) 湖³⁴の南および南東の岸に面していて、美しい森と耕作に適した良質の土地か

²⁹ 「大滝」と訳したのは cataracte であるが、ワールプールは渦巻く水流を引き起こしながら流れる急流で、ナイアガラ川では白い水しぶきをあげながら流れている箇所であるが、滝ではない。カデルリーがトロントに渡ったニューヨーク州のルイストン村はワールプールの下流にあり、ワールプールを見ずに書いたのかもしれない。カデルリーはニピシング村のほとんど落差のない小滝も cataracte を使っており、カデルリーのフランス語力では滝の大小の区別や急流との区別が表現できなかった可能性もある。

³⁰ ナイヤガラ川流域は起伏はあっても、基本的にかなり平坦な土地をナイアガラ川がえぐりつつ、峡谷をつくっており、沿岸の土地を「山々」と表現するのは不適切だと思われる。

³¹ ナイヤガラ川の流れる方向を逆に行っているようだ。ナイアガラ川はエリー湖からオンタリオ湖に流れているので、オンタリオ州からエリー湖へ注いでいるという書き方は間違いである。

³² 合衆国ニューヨーク州にあり、ナイアガラ川に面している。現在はルイストンとトロントの間に航路はないが、やや時代が下がるが、*The Northern lakes of Canada* (Barlow Cumberland編、第二版、トロント、1886) にアメリカ側のルイストンからカナダ側のナイアガラ・オン・ザ・レイクを経てトロントを結ぶ便が1日2便あったことが記載されている。

³³ 実際には、1年半カナダに留まったわけではないが、計画があったのだろう。伝記によると、ニューファウンドランド島から捕鯨船でヨーロッパに帰る計画を立てていたようである。

³⁴ ニピシング湖は面積が873.3km²あり、琵琶湖が669.2km²だから、日本最大の湖よりもかなり大きい。最大水深は52mで、平均水深が4.5mだから、全体的にかなり浅い湖である。ニピシング湖

らなっていた。さらに、この入植地へと向かったスイス移民の最初の家族たちが、ケルベール夫人の指揮のもとスイスからケベック州を經由して、数日前にはすでに到着しているということを知らされた。私はこれら移民の家族のリーダーたちと知り合いになった。数日もするとケルベール夫人やこれらの家族にいたる大人たちの大部分から、カナダにいるスイス人移民のために将来入植地として確立するに違いないこの地方を調査し、その成果をスイスで発表できるようにすることを頼まれた。オンタリオ州の農業担当課と公共土木工事担当課がこの探索の費用を引き受けると申し出た。こうして私は、ザンクトガレン³⁵出身のジャック・ブルンシュヴァイラー (Jaques Brunschweiler³⁶)、オブヴァルデン準州 (Obwalden) 出身の園芸家のエドゥアルト・フォン・ツーベン (Edouard von Zuben³⁷)、バーゼル³⁸出身で同じく園芸家のエドゥアルト・シュミット (Edouard Schmid) らとともに旅を始めたのであった。パリーサウンド (Parry Sound)³⁹のカナダ人ガイドは、ニピシング周辺のことをよく知っており、私たちとヘルムスリー (Helmsley)⁴⁰で合流した。

ニピシング湖はオンタリオ湖より200マイル北に位置している。私たちはカナダノース鉄道⁴¹で、午後のうちにトロントを離れた。そして1時間半後には、長さ45マイル幅15マイルのシムコー (Simcoe) 湖と向かいあっていた。この鉄道はオリリア (Orillia) 行きで、途中多くの駅と駅を結びながら、肥沃でよく耕作された平野地帯である西海岸を横断している。このオリリアという町はトロントの北80マイルにある小さな町で、それ以上は汽車が走っていなかったため、私たちはそこに泊まらなければならなかった。次の日の午後に私たちはワシャゴ (Washago) に到着した。そこは現在マスコーカ (Muskoka) 地区⁴²を横断

を水源に持つ流出河川がフレンチ・リバーで、ヒューロン湖のジョージア湾に注いでいる。

³⁵ カデルリーはフランス語式に St-Gall を使っている。

³⁶ MAGEE (1991: 85) では Jaques ではなく Jacob。

³⁷ MAGEE (1991: 85) では Edouard ではなく Eduard。エドゥアルト・フォン・ツーベンはいったんスイスに帰国するが、親戚の一家がまずカナダに移住し、数年遅れて彼の一家も移住したらしい (MAGEE 1991: 86)。

³⁸ カデルリーは Basel ではなく、フランス語名 Bâle を使用している。

³⁹ カデルリーは Parry Sund と誤記しているが、MAGEE (1991) に掲載されている1879年の地図でも Parry Sound である。なお、ニピシング村はニピシング地区ではなく、パリーサウンド地区の北端に位置している。

⁴⁰ ヘルムスリーはロッセー湖畔の都市で、現代ではロッセー (Rosseau) という名称に変わっている。

⁴¹ chemin de fer du nord canadien と書いている。英語では Northern Railway of Canada と呼ばれる会社で、後に国有鉄道に吸収されている。

⁴² 現地の発音に近い表記がマスコーカのようなようであるが、2010年6月に主要8か国の首脳会議がこの地域で行われたが、新聞報道では「ムスコカ」を使っていた。

する鉄道の終着駅である。私たちはそこから14マイルほど駅馬車に乗って進み、途中多くの急流が行きかい、花崗岩や片麻岩の塊の上を水が落ちながら無数の美しい滝を形作っている、岩石地帯を通過した。この岩石と森の迷宮の途中で、ヘラクレスの擁護者のような古くからの番人のごとき人物が宿屋を営んでおり、そこに要塞都市ジブラルタルを模したものを築いていた。先が木の太い胴でできている6つの太いピストルの銃口が、岩の上から向けられていて、銃眼を通して到着者たちを脅している。それはまるで本気で彼ら（＝到着者たち）に宿泊客の場所を奪わせないようにしているかのようだ。夜ごろにはマスコーカ湖に面したグレイヴンハースト（Gravenhurst）の町に到着した。翌日にはロッソー（Rosseau）湖沿岸のヘルムスリーという村に行くために蒸気船でそこをたち、そして4時間の道のりを経てその村にたどり着いたのだった。ロッソー湖の水位はマスコーカ湖の水位よりも数フィート程高かったので、2つの水門を使って容易に航行できる。多くの島は木の生えた頭を湖面の上に出しており、この二つの湖の中でいわゆる群島を形成している。この湖の岸辺にはいくつかの村や孤立した施設が点々としている。そして伐採されたばかりの林間の空き地が多く存在していることが、ごくわずかな年月の間にこの地域に活発な変化が広がったという動かしがたい証拠となっている。ヘルムスリーは現在鉄道と蒸気船の終着駅となっていて、トロントから156マイル地点にある。私たちが北への旅を続けるために馬に乗り換えたのはここである。この地方での言葉の意味に従うと、ここで二つの新しい道に分かれる。一つはここから18マイル離れたヒューロン湖のジョージア湾⁴³近くにあるパリーサウンド村に至る道だ。そしてもう一方の道は、64マイル北にある、私たちの探索の目的地、ニピシング湖へと続いている。

私たちはパリーサウンド地域に至った。そこは面積2500平方マイルで、その北部は将来的にスイスの入植地として確立されるだろう。新しくできた主要道路に沿った場所だけではなく、この地域に数多く存在する美しい川や風光明媚な湖のほたりにも、住民が急激に増え始めている。この地域を一目見れば、変化に富んだ岩石地帯と耕作に適した土地が連続している様子が見える。そのどちらも大変重要度が高いことから、この地域が入植地として確立するといえるのである。このような変化に富んだ様子がよく繰り返されるのを見ることができるとはたった1マイルの空間だけで、他の場所ではひとりが定住している地域

⁴³ カデルリーはla baie St-Georgesと書いているが、ジョージア湾はイギリスのジョージ4世にちなんだ命名なので、「聖」は付かない。正しくはla baie Georgienneである。

が大きな途切れもなく何マイルにもわたって広がっている。村々で入植者が集まり始めたのは、耕作に向いているこのような場所である。これらはモンテス (Monteith) 村についても同様である。セギーン (Seguin) の滝近辺では、スペンサー (Spenser) 村、ライアソン (Ryerson) 村、マグネタワン (Magnetawan)⁴⁴ 村や他のさまざまな新しい村が形成され、年々広がっている。(今後は) この他にも村ができていくだろう。そして耕作に適した土地は、その場所を農業に譲り、森の大部分は少しずつ消えていき、多くの年月を経て、とうとう岩石だらけの土地しか森に残っていなくなるまで消え続ける。他の村もこれらの例を追うことだろう。

私たちはいわゆる宿屋 (オーベルジュ⁴⁵) というものにこの64マイルの道中出くわしていない。とはいえそれでも新しい村に着けばどこでもよそ者向けの店があった。それらの店はきちんと整っていて、たいていは農民が営んでおり、たいそう気楽なものだ。そこではアルコール類は出ないものの旅人は良心的な値段で、寝床と簡素ながらおいしい料理にありつくことができる。これらの店のいくつかは、すでに何年も前から存在しているにもかかわらず、私は道中ずっと、居酒屋はたった1軒でさえ目にする事はなかった。連日続いた雨が新しい道を殆ど通行不可能にしてしまった。私たちが目的地に到着するまで、ヘルムスリーを出発してからたったの4日間しかなかった。モンテスは私たちの最初の宿泊地であり、マグネトワンは二番目、コマнда (Commanda) 川⁴⁶の河岸にある猟師用の小屋は3番目の宿泊地であった。この最後の場所で、私たちは毛皮専門のカナダ人猟師たちに歓待を受けた。彼らは秋の間この地域を猟場に選んだのだった。いわゆる猟小屋の周りには腹が割かれた大きな6頭の雄鹿が木につるされていた。

私たちは一番大きな鹿を4ドル⁴⁷で、少し小さな残りの3頭は、1頭当たり

⁴⁴ カデルリーは報告書で一貫して Maganetowan と書いているが、現在は Magnetawan である。Maganetawan, Maganetawa などの表記も当時の他の資料に見つかる。インディアン語由来の地名は名称の確定や安定に時間がかかったのであろう。

⁴⁵ オーベルジュ：フランスを中心にヨーロッパに存在する宿屋の営業形態。宿泊施設に飲食店スペースを併設している。旅籠。

⁴⁶ カデルリーは川名を Commando と書いているが、現代の表記は Commanda である。訳では川名としてコマндаを使っている。コマンドはカデルリーの間違いというよりは、川名が変遷したものかもしれない。ハーン (HAHN: 1878) でも Commando が使われている。

⁴⁷ カデルリーは報告書でドルではなく、エキュ (écu) を使っているが、エキュとドルとターラーは大型銀貨1枚に対応した貨幣単位で、ほぼ等価だったようだ。1867年刊行の6か国語商業用語辞典 Wörterbuch der Handels- und Geschäftssprache. (Stuttgart: Julius Maier) によると、英語の dollar に対するフランス語は écu になっている。

3ドルの値段で譲ってもらった。ここでは、たくさんの獲物が取れても殆ど買い手がつかないようなときは、食用になる肉でもそのままにし、猟師は皮と角を取るだけにとどめる。毛皮専門の猟師は夜であるにもかかわらず罝を仕掛けに行く。夜中、雄鹿が隠れ家に戻るずっと前、猟師は獲物が隠れ家に戻るために通る道を探す。そして猟師は一日が始まるころに小屋へ戻ってくるが、その時手ぶらであることはまれで、たいてい、獲物の頭の周りと同前足にロープを結びつけ、獲物を小屋まで引きずってくる。昼食の後、猟師は罝のところに引き返し、毛皮をまとった獣を持ち帰る。皮をはいだら、夕食をとり、夜に再び設置場所に罝を仕掛けに行くまでは横になっている。テンやオコジョ、カワウソやビーバー、ジャコウネズミなど、私たちは美しい毛皮がつるされているのを目にした。またさらに小屋の中で、黄色オオカミやオオヤマネコ、野生猫など、売却済みのもの（＝毛皮）も見かけた。客が集まる暖炉の周りには、話し好きの毛皮猟師たちがかたまっていて、これから探検しようとしている地域に関する情報や、指示を授けてくれた。また、その後のニピシング湖沿岸地域の探検にとっても役立つ、たいそう正確な基礎知識も教えてくれた。4日目の午後、目的地に到着した。そこはビーティー（Beatty）氏⁴⁸の所有地で、サウスリバー⁴⁹沿岸に位置する。同じ日、私たちはその付近を歩いて回った。移住を望んでいる同胞のスイス人に提供するのに十分な資料と、この地域の正確な光景が得られたと思えるまで、数日間付近の探索を続けた。この地域はいずれ新しいヘルベティア⁵⁰となるであろう。オンタリオ政府もカナダにそれを築きたいと願っている。

ニピシング湖はその大きさもスイスのコンスタンス湖（lac de Constance）⁵¹に少しばかり似ている。（コンスタンス湖より）少し長い東西の距離は13時間、

⁴⁸ ニピシング村、正確には村が成立する前の最初期の開拓農民としてチャップマン氏とビーティー氏がよく知られている。とくにビーティー氏はニピシング村創成期の有力開拓農民で、当時の他の文献でもBeattyと表記されていたし、本稿掲載のビーティー氏の墓石の写真でもBeattyが確認できる。カデルリーがBeatyと表記したのは不注意であるが、フォン・ケルバー夫人が訂正しなかったのは、編集の杜撰さである。

⁴⁹ 報告書では川名がオジブワ語起源のNamanitigongが使われているが、現代では、South Riverと呼ばれている。カデルリーは、ビーティー氏の農場はこの川のほとりにあり、コマンド川の水源も近くにあり、小さな蒸気船ならサウスリバーの下流まで航行でき、ニピシングの集落はそこにあると述べている。さらに、オンタリオ州が移民のために準備したニピシング湖畔の土地はこの川の左岸にあるという記載もある。サウスリバーの下流にはChapman's Chuteという落差の小さな滝があり、そこまでは小さな船なら入ることができる。

⁵⁰ ヘルベティアとは、Helvétie、つまり、古代ガリア東部のこと。現在のスイスの位置に当たる。

⁵¹ ドイツ語名はBodensee、ボーデン湖と呼ばれる湖のことである。

少し長い南北の幅は4時間である⁵²。サウスリバーの左手にあたるこの湖の南と南東の岸辺は、蒸気船でも航行可能であり、コマンダ川はこのすぐ近くに水源を持っている。これらの沿岸地域に面して樹木の多い200平方マイルの土地がある。

この土地は耕作に適した大変良い土壌に見える。珪土質で黄色っぽい粘土でできたしっかりとした地層で構成されており、その上に有機物の残滓に由来する硬い腐植土の地層が覆っていた。すでに述べたとおり、この土地はニピシグ湖の南と南東の岸に接しており、他にも5つの小さな湖を抱えている。レストール (Restoule⁵³) 湖、コマンダ湖、マコーレイ (Macauley) 湖、ルース (Routh) 湖、ジェシー (Jessy) 湖の5つであるが、それらはビイエヌヌ (Bienne)⁵⁴の湖と比べたら少し大きく、ズグ⁵⁵の湖と比べたら少し小さいかもしれない。これらの湖と河と、重要な岩石地帯の概観から推論を立てると、約80000エーカー⁵⁶の大変耕作に適した土地の一角がまだ残っているだろう。そこはヒマラヤ杉や数種類の松、河口付近では特にカシワやカエデ、ブナ、カバノキ、バルサムモミ、セリ類、ハンノキなどの密生した森に覆われており、大概茂みはほんの少ししかない。山火事によって、付近の森は数百エーカーの空間が数箇所にわたって破壊された。そして梢が奪われ、殆どが焼け焦げてしまった木々は、災害のあった場所で惨めに聳え立っているか、横たわっているかしている。それらの木々は将来入植者たちが斧を持ってやってきて、灰を新しい命へと生き返らせ、新たな豊かさとして復活させるために、これら(の火災)の残骸までも火にくべてしまうまではそのままにされているだろう。カナダのこの地方はいかなる山脈もないが、土地の形状には起伏がある。長さ10マイル、高さ200から300フィートの一連の小丘陵地帯は大変緩やかな斜面〔傾斜58度⁵⁷〕を南東に持っているが、サウスリバーの河口から南西方向にレストール湖の周辺まで広がっている。この連なりは、現在最も標高が高く、豊かな森で覆われている。そして、粘土や砂が沈殿してできた地層や流動性の高い地層、または珪土質の地層

⁵² ここでは距離を時間 (heure) で表している。ニピシグ湖はもとより、それより南のパーリーサウンド地区も測量調査などが終わっていなかったため、正確な地図もなかったため、このような表現の仕方になったのだと思われる。

⁵³ 現代なら Restoule であるが、カデルリーは Restoul と表記している。

⁵⁴ スイスのカントン・ベルンの湖の名。都市名でもあり、フランス語圏とドイツ語圏の境界上であり、二ヶ国語が使われ、ドイツ語では都市名が Biel で、湖は Bieler See と言う。

⁵⁵ ズグ: Zoug。スイスのドイツ語圏のカントン名で、ドイツ語名は ツーク (Zug)。

⁵⁶ カデルリーはエーカーではなく pose と書いている。

⁵⁷ 5.8度の間違いだろうか。

で構成されており、スイス北西部のブドウ栽培をしている土壌と大変良く似ている。偽花崗岩⁵⁸と片麻岩からなるいくつかの山の支脈は、斜面が孤立し、半ば変質した状態にある。土砂でできた土地の上にある地層では変質した片麻岩と花崗岩がよく混じり合っている。氷河期にここに沈殿した斑岩やトラップ⁵⁹の標石⁶⁰は、これらの小山のふもとを流れるサウスリバーの川床に散在している。この気候は緯度46度の他の地域と比較すると、並外れて温暖である⁶¹。ここより200マイル南に位置するオンタリオ湖沿岸よりさらに少し暖かくさえる。(南北の)二つの半球では、異なる緯度を通っていたとしても、同じような気候状態の等温線を示すことがある。それと同様にして、地域的な事情や状態が原因となって同じような(気候上の)違いが、小規模ではあるが同じ国の中においてもしばしばおこる。この低い丘陵地の南東の斜面は、東と南に向いていて、北風から保護されている。このような気候条件を見ると、数年以内に周辺は入植地になり、森林の大部分が畑や牧草地に変わり、そのときになれば、ここでブドウ栽培をうまく導入できるのではないだろうかと思われる。ピーティー氏と他3、4人の開拓移民の人々は、11月上旬になる前には激しい寒気に見舞われることがまれにあるものの、10月中旬よりも前に寒気が来ることは決してないと私に保証してくれた。

ゆえにブドウを熟させ、収穫するのに十分な期間があるといえるだろう。日のあたる斜面の上で雪は4月の半ばか3月の末には姿を消す。私の滞在中11月7日の夜中に、せいぜい1インチの層になるかならないかというほどの、(その年)最初の雪が降った。しかしまだ割合暖かかったので、雪は次の日の午前中のうちに溶けてなくなってしまった。そこでは、朝に薄い氷の層に覆われる小さな小川くらいしか殆ど存在しない。ここから25マイル行ったところは、より南方にあるにもかかわらず、何日か前から寒さを感じ、雪が4インチ積もった。私の意見からすれば、ヌシャテル湖やレマン湖⁶²で栽培されている早生のブド

⁵⁸ ここではpseudogranitを「偽花崗岩」と訳したが、pseudogranitは辞書になく、狭義の花崗岩ではない鉱物を指していると思われる。後に花崗閃緑岩などと呼ばれるようになった鉱物は、広義では花崗岩の仲間らしいが、厳密には花崗岩とは言えず、そのような鉱物を指しているのだと推定できる。

⁵⁹ trappと書いているが、フランス語の辞書にはなく、カデルリーはドイツ語を紛れ込ませたらしい。トラップ(Trapp)は「岩床状の粗粒玄武岩・輝緑石などの総称」(『小学館独和大辞典』、1985)。

⁶⁰ 標石。氷河に運ばれた岩石が、氷河の解けた後に残ったもの。迷子石。捨て子石。

⁶¹ 同一緯度で気温に差が出ることを理由にこの地が温暖なことを説明しようとしているが、大陸の東西端などで起きる気温差が暖流の影響などを受けていることは当時でも常識であっただろう。

⁶² カデルリーはジュネーブ湖という名称を使っている。

ウヤあるいはライン川の北部の地域の早生のブドウでもよいかもしれないが、これらの早生のブドウをカナダに根付かせる計画を成功させるためには、まず最初にここに導入すべきではないだろうか。カナダのいくつかの地域の気候、とりわけ新しい入植地の気候はスイス北西部のそれと大変よく似ている。オンタリオ州にはそれなりの大きさのたくさんの湖、そして数多くのモミの木、鉄分を含んだ地質やその他の好ましい条件があり、それらの条件がこの気候を健康に良い気候の一つとする原因となっているのだろう。一方、スイス北西部は、大きなモミの森や鉄分を含んだ土壌をオンタリオと同程度持っているわけではない。しかしだからといって、オンタリオをスイスにたとえる考え方を覆す論拠とすることはできないだろう。なぜならばしばしば異なる原因でもよく似た結果になることがあるからだ。

サウスリバー、レスツール湖、コマンダ湖、マコーレイ湖などではビーバーを大変間近で見かける。それらは80平方マイルの場所に分散して生息しており、20~30インチ⁶³もしくはそれ以上の大きさのビーバーがいる。この天然の牧草地は、その名が示すとおりビーバーの群れ全体の本能と勤勉さによって始まっている。数世紀前、つまりは毛皮の取引がまだ殆ど広がっていなかった頃、そして毛皮用の動物が現在のように毛皮猟師や狩猟家に追い詰められることがまだなかった頃、これらの勤勉な動物、すなわち知能に恵まれたビーバーは、切り歯で切った木の樹皮の上に、自分が運んできた土をのせることで、整った大きな堤防を作り上げていた。私がヴァンクーヴァー島で見かけたのと同様に、せき止められた小川は湖つまりビーバーの湖を形作っていた。ビーバーが二階建ての小さな木製城塞の植民地を作っていた湖の沿岸では森の広い部分が水浸しになっていた。ほとんど常によどんでいる水は、すぐに木の根を侵食していった。そして最も強靱な木や新しい木さえもが、その死の運命をまっとうしてしまうまで、時とともに一つずつ倒れていったのだった。木の根、幹、梢は腐り、少しずつ分解されていった。分解中の有機物で飽和状態の水は、それらを湖の底で腐植土として沈殿させていった。数年の時の流れの中で春と秋の洪水により、川の流れを奪ったこれらの堤防は砕かれ、小川は少しずつ昔の狭い川床に戻っていった。そこでは殆ど残っていない水が蒸発してしまい、肥沃な腐植土

⁶³ 報告書ではposeという語が使われている。インチに対応する当時の正しいフランス語はpouceである。カデルリーはpouceをposeと間違えたのかもしれないが、報告書の他の部分で土地の面積のエーカーについてもposeを繰り返し使っているので、分からない語を架空のposeにとりあえず置き換えたものかもしれない。

の土地では、樹木はないもののすぐに野生の草花が生い茂る草原でできた緑のじゅうたんで覆われていった。そしてその草原は長い間、鹿たちの大好きな牧草地をもたらし、少し遅れて近くの開拓移民に豊かな干草の収穫を与えていた。

サウスリバーは将来的にできる新しい入植地の東側を区切る川であるが、そこは下流の滝まで小さな蒸気船で航行することができる。またこの川は入植地とニピシグ湖を結ぶことになるわけだが、そのことによってヒューロン湖にあるジョージア湾⁶⁴やミシガン（Michigan）湖、上流のエリー湖などとフレンチリバー（le French River）の川を結ぶことにもなるだろう。アメリカの運河体系によって入植地が、一方ではミシシッピと他方では西側で大西洋と結ばれるだろう。そして南側⁶⁵ではトラウト湖⁶⁶やタロン湖⁶⁷、マタワ⁶⁸川、オタワ（Ottawa）川によってセント・ローレンス川⁶⁹と大西洋北部の海への航海へと結ばれるだろう。ニピシグは現在この州の首都トロントへ新しい道でつながっている。カナダの鉄道所長は現在マスコーカ横断線はワシヤゴ⁷⁰が終着駅になっているが、来年にはすでにグレイヴンハーストまで延長され、5、6年後にはニピシグに達すると私に断言してくれた。大陸を横断するカナダ北部の鉄道は、

⁶⁴ カデルリーはここではジョルジュエヌ湾（ジョージア湾）をサンジョルジュ湾と書いているだけでなく、湾のスペルも英語の Bay との混同か、baie と書くところを大文字で Bai と書いている。

⁶⁵ 「東側」の間違いか。

⁶⁶ カデルリーは lac des truites、つまり、マスの湖と訳している。現在の英語圏出版の地図にもフランス語名が併記される場合があるが、トラウト湖の場合は併記されていない。トラウト湖は、ニピシグ湖の東にある小さな湖で、マタワ川の水源になっている。マタワ川はマタワでオタワ川に注ぎ、そのオタワ川もセントローレンス川に注ぎ、大西洋まで流れている。人口約5万4千人のノース・ベイ市はニピシグ湖周辺で最大の都市であるが、トラウト湖の水を飲料水にしている。なお、トラウト湖という名称はオンタリオ州には複数あるようで、マスが多いことが特徴になっているのだろう。パリーサウンド地区はイワナの仲間のカワマス（brooktrout, speckled trout）が豊富に生息していたようだ（MCMURRAY 1871: 134）。

⁶⁷ カデルリーは lac des talons と書いている。talon とは「かかと」の意味なので、湖の形状を複数のかかとに見立てた命名ということになりそうだが、実は、ネット検索してみると、当時でもフランス語名は lac Talon であり、カデルリーは湖沼名を間違えていると思われる。英語名も Lake Talon や Talon Lake がネット上でも使われていることを考えると、「かかと」の意味のフランス語の talon がそのまま使われたと考えるより、タロンというフランス人やフランス系の住民の名前に由来した名称である可能性が高い。たとえば、ヌーヴェル・フランスの地方長官にジャン・タロン（Jean Talon, 1625-1694）というひとがいるので、このひとの名前が地名に残っていてもおかしくない。なお、トラウト湖から流れ出たマタワ川は少し下流でタロン湖に注いでいる。

⁶⁸ カデルリーはマタワ（Mattawa）川を一貫してマタワン（Mattawan）と書いているが、川名も集落名もマタワである。なお、現在、Mattawan という小集落がマタワの対岸にあるが、ここはスイス移民の中心地のひとつだったマタワではあり得ない。

⁶⁹ フランス語ではサン・ローラン川（St-Laurent）で、カデルリーはこちらを使っているが、翻訳では日本で普及している英語名を使用した。

⁷⁰ カデルリーは Washago をここでは Whashago と書いている。

アメリカの鉄道のように太平洋と大西洋をつなげ、カナダとブリティッシュ・コロンビアをつなぐだろう。ヴァンクーヴァー島は、カナダ中央政府によってなされた契約文書によると、1883年までには完成するようだ。鉄道の道筋は新しい入植地を横切る。

ブリティッシュ・コロンビアとヴァンクーヴァー島を、私は先の春に訪れたのであるが、その地域はカナダが10年以内に大陸横断鉄道を完成させ、それを交通網としてさらに加えることを引き受けるのを条件にして、つまりは中央政府が認めた条件で、カナダ地域の連合に同意した。この大きな計画は少なくとも去年の6月にヴァンクーヴァー島のヴィクトリア（Victoria）近くのエスキモルト（Esquimalt⁷¹）で実行に移された。そこで盛大な儀式がとりおこなわれ、停泊中の戦艦が放った大砲の爆音の元、ブリティッシュ・コロンビアの総裁が最初のシャベル一杯の地面を綺麗な手で掘り返した。技師たちの事前の作業はすでに鉄道全面でむらなく続けられている。

サウスリバーの下流の滝に面しているニピシング村は新しいがまだとても小さな村で、新しい入植地の最も近い隣人となるだろう。住民たちは両手を広げて新しくやってくる人々を受け入れ、可能な限りアドバイスを与えたり、人手を貸したりして新しい入植者たちを助けるだろう。私はニピシング村の住人たちの大部分にこのことを約束してもらえた。顔つきからみて、彼らは約束を守る人だと私は思っている。私たちはビーティー氏の家に泊まったのだが、彼は6、7人いるこの村の開拓民⁷²の中で一番裕福であった。彼は新しい入植地用の土地と似通った、良質の土地を400エーカー所有している。この400エーカーの土地のうちすでに100エーカーは開墾されている。つまり木が切られており、最も見事な幹と太い木は取り除かれ、後で使うために積み重ねられるが、残りはすべて焼かれている。便宜上、木は地面から3～4フィート上で切られ、切り株はそのままにされる。地面から木がすっかり完全に一掃されるのは、木の根が腐り始める、それから4～5年だけ後のことだ。一本の強い鎖を切り株と2、3の主な根に結びつけ、次に牛を3～4組そこにつなぐ。この方法だと、1エーカー整地するのに2日かかる。切り株がまだ土の中にある限り、最初の4～5年の間土地は耕さない。しかしその間は鉄の重い馬鋤を使って土地に筋をつけ、種をまき少し軽い木製の馬鋤を使って種をまいた畑を覆うという作業をする。最初の5～6年は堆肥をやる必要がない。というのも、そのままでも

⁷¹ カデルリーはEsquimaltと表記している。

⁷² 「開拓民」にsettlerという英単語を使っている。

生産力が十分にあるからだ。もう少し後で証明するだろうことだが、そういう土地では土地に肥料を施さずとも最も豊富な収穫を得ることができるのだ。この期間中はすでに作られているであろう人工の草地や、あらかじめ見つけておいたビーバーの牧草地の方に全ての堆肥が運ばれる。このようにするのは今述べた草地にそれが必要だからというより、他に合理的なやり方がないためである。犁や堆肥を導入することができるのは地面が完全に整地されてから5年後のことで、計画的な農業に取り掛かれるのもその時からである。土地を耕作に適するようにするこの方法は、与えられた条件の中では最も現実的な方法だと私には思えた。政府は家を建て、ある一定のエーカーの土地が開墾された場合に限って土地の贈与証書を手渡す。先に述べたように、まだ木の切り株が散在している⁷³土地でも、政府は開墾されたものと認め、入植者の利益のために心遣いをする。こんなわけで、移民はまず先に土地をすっきり整地したいと思ったとしても、それよりずっと先に証書で公認された、200~300エーカーの土地を手に入れることになるだろう。その上移民はすぐに豊富な収穫を得られるという、大きな利益にも恵まれている。なぜなら1エーカーの土地を完全に整地するまでの間、同時に切り株を残した状態で3エーカーの土地を開墾できるのだから。ここでの経験から、完全に整地された土地は、最初の数年間明らかに半開墾状態の土地ほどは豊かな収穫量を生産できないということが証明された。なぜなら、切り株を抜いてしまった土地では、土壌があまりにも激変してしまうからであり、そして低いところにあった地層や不毛な地層が掘り返されて表面に出てきてしまい、穀物の根が腐植土に到達できないからである。堆肥さえも投じてこの場所の土壌改良を試みたが、最初の数年間、土地は殆ど改良しなかった。ビーティー氏のところでは、1年あたり20エーカーの土地を耕作可能な土地に回復させている。干草はここではよく売れるし、たくさんの家畜の健康を保つために必要になるので、切り株を先に取り除くということはずせぬ、切株があるままの土地にアルファルファとヒマドヤシとオオアワガエリ⁷⁴を混ぜてまき、人口の牧草地を約30エーカー作った。

春から秋の終わりまで、仕事に使われている荷物運搬用の家畜を除いて全ての家畜は、森の中にいて野生の草を食べている。家畜小屋はしまっていて、家畜たちが干草を食べるためにやってくるのは、冬の始まりから春になるまでの間だけだ。頑健で栄養状態もいい4頭の馬や、素晴らしい角のある約20頭の家

⁷³ 原文にはjouchéと書いてあるが、jonchéの間違いだと判断して訳した。

⁷⁴ timotéeは、オオアワガエリ（牧草）。

畜、かなりの数の仔牛や豚の群れなど、私たちはこの農家で保有されている見事な家畜を見た。そこでは羊小屋がとても繁栄しそうであるにもかかわらず、羊を見かけなかった。私たちは後にマグネタワンでもそのことを確信した。先に述べた農地の所有者⁷⁵についての種まきと収穫と生産物の売り上げに関する情報がある。

《干し草》 収穫：1 エーカーあたり約2.5 t ⁷⁶
売上：1 t あたり40～50ドル

(ここに書き写した全てのデータはまだ切り株が取り除かれていない土地のものである。)

《オート麦》 種蒔：1 エーカーあたり2.5ブッシェル⁷⁷
収穫：1 エーカーあたり45～50ブッシェル
売上：1 ブッシェルあたり1.25～1.5ドル

《大麦》 種蒔：1 エーカーあたり1.5ブッシェル
収穫：1 エーカーあたり25～30ブッシェル
売上：1 ブッシェルあたり0.6ドル⁷⁸

《ジャガイモ》 植付：1 エーカーあたり20～25ブッシェル
収穫：1 エーカーあたり300ブッシェル
売上：1 ブッシェルあたり0.6～1ドル

《エンドウ》 種蒔：1 エーカーあたり2ブッシェル
収穫：1 エーカーあたり25～30ブッシェル
売上：1 ブッシェルあたり1.5ドル

現在これらの農産物を販売するための市場は、38英マイル離れたマタワ⁷⁹の石切り場と木の伐採区域にある。そこでは木を販売する会社が100平方マイルにわたって土地を占領していて、800人の労働者をcharaente⁸⁰の木を切つてのこぎ

⁷⁵ ジョン・ビーティー氏のことだと思われる。

⁷⁶ カナダ農務省 (DEPARTMENT OF AGRICULTURE 1880) の英訳では「1.5t～2.5t」と幅を持たせている。元のフランス語の報告書より英文抜粋が詳しく記述しているというのは奇妙だが、英訳のミスの可能性もあるだろうし、カデルリーの書いたフランス語原稿をフォン・ケルバー夫人が印刷させる際に生じたミスだったのかもしれない。

⁷⁷ ブッシェルと訳した箇所は報告書ではboisseauというフランス語が使われている。カナダ農務省のカデルリーの報告書の抜粋の英訳ではbushelが使われている。ブッシェルは穀物や果物の量をあらわす単位で約36リットルである。

⁷⁸ カナダ農務省の英文抜粋では0.6ドルではなく、1.5ドルになっている。

⁷⁹ マタワン (Mattawan) と書いているが、マタワ (Mattawa) である。

⁸⁰ charaenteに該当する単語は見つからなかった。綴り間違いも考慮し、近い綴りも調べてみたが、それらしい単語は見当たらない。

りでひくために雇用している。それらの木はマタワでオタワ河を筏でくんだり、それから海を渡って発送するために、セント・ローレンス川を下る。上のような価格になるので、200～300頭の荷物運搬用の家畜にとってオート麦や干草がそうであるように、労働者向けには大麦やエンドウ、ジャガイモは最高の投資とみなされている。将来的にニピシングを蒸気船で航行することになることも、行き来する交通手段の向上と増加も、今の穀物におけるこの高値をオンタリオでの正常価格へと少しずつ引き下げることに貢献するだろう。一方ではこのような価格の下落が予測されているにもかかわらず、もう一方でそのような事態がここ4～5年では生じないということも確実である。というのも、木材を販売している会社は、彼らの会社を2倍3倍の大きさにするために会社の周辺で農業が発展することしか期待していないのだ。ニピシング村はマタワに最も近い、最近できた農業地域である。ここではゆっくりと値段が下落してはいるものの、まだ当分の間、過剰生産物を有利に売り込むことができるだろう。各世帯用および家畜用の貯蔵と、労働者の給与を差し引いた収穫高は、ビーティー氏のふんを除くと、1872年には1500ドルきっかりという相当な額に達した。耕作に適した土地を一年につき20エーカー増大させることで、この額は年々増加することだろう。ビーティー氏の試験栽培によれば小麦、ライ麦、トウモロコシ、雑穀類、そして同じく夏小麦と冬小麦もこの地域で同じように育つ。しかし先に値段とともに示した生産物が、現在の市場ではとてもよく売れるため、ビーティー氏とその近隣農家は一時的にそれらの生産物だけに栽培をとどめている。数年前から植えられた果樹は、急速にとてもよく成長している。今から数年の間に美しい果樹園を持つことが期待されている。この地域では入植者と毛皮猟師が、とても簡単な方法でメープルシュガーを生産している。木のあちこちに穴か切り込みを入れ、そこから少しずつ流れ出る無色の樹液を容器に入れる。その容器は大量のシロップを濃度がつくまで大きな窯で火を通すためのもので、加熱後は、後で粉末にするためにそのまま冷やしておく。

この生産物は商店で売っている赤砂糖とよく似ていて、質でもそれに殆ど負けない。春取れる樹液を主な目的として私有されている木は、3～4年後には枯れ始める。それゆえにメープルシュガーの製造は、合理的な植林者とは相容れないのかもしれない。

ニピシング湖の南と南東の沿岸における地質学的な状態は、本質的に深成岩の岩盤で、私たちが観察した限りでは、火山質の岩盤はどこにもない。私たちが発見した徴候からすれば、この地域は地表が形成された中生代の最終段階に

において地質学上の大きな変革が起こった舞台だったように思われる。偽花崗岩と閃緑岩の変成岩が融解してできた大きな塊は、上部に形成されている結晶してできた石の層を通過して通り道を切り開いた。さらに中生代の岩盤と中間の地層を通り抜けて上がり、地表にある森の粘土に達したのだった。そしてその森の粘土のいたるところで冷え硬い層になる前に沈殿したのだ。グレーワック⁸¹や片岩、雲母、片麻岩などの断片や、噴火が元になってできた石灰石の断片は、片麻岩をのぞくとこのあたりのむらのない地層ではどこにも見つけることができない。花崗岩や片麻岩がこれらのいろいろな岩石を通過しているときにおこったさまざまな変化と、先に述べたこれらの岩石の断片は、どちらも前述のことを証拠づけたように思われる。大洪水で運ばれた粘土質の堆積物は、後に現在の床土となった。鉄分を含んだ花崗岩が分解されてできた岩石の塊。大洪水の堆積物からなる上の層と混ざってしまった、花崗岩と同様に鉄分を含む変性した閃緑岩（角閃石）によってできた塊。これらの塊は上の地面を形成した。上の地面とはすなわち、耕作に適した下流の土地のことであり、現在、そこでは廃物に由来する腐植土でできた薄い上の地層の上に有機体の命が広がっている。サウスリバーは豊富に鉄分を含んでおり、その水はかすかに錆の色がついている。というのも、この川の水源は鉄分を含んだ広大な黄土の地層を溶かし込んでおり、地層を水とともに運び出しているのである。程度は低くなるものの、コマダ川についても同様のことが言える。二つの川の間にある土地を地質学に基づいて調査すれば、後に、とても重要な鉄の堆積物の発見へと導かれることは間違いないだろう。私はサウスリバーの河口で黄色い黄土のかけらを見つけ、コマダ川の右岸では磁気を帯びた鉄の鉱石のかけらを見つけた。しかし私の探検の目的は鉱物学的というよりもむしろ農業的なものであったので、これらの鉱石の堆積物を探すための時間はごくわずかしかなかった。私はさらにとても美しい硫化銅の標本と、パイライト⁸²〔銅の鉱石〕の標本を見た。それらは周辺のとある毛皮猟師の持ち物で、彼は猟をしている土地でこの鉱石の鉱山を見つけたのだった。彼は高い金を支払わなければ、当然この秘密を売りたいとは思わないだろう。サウスリバー右岸で下流の滝⁸³から1マイルほど東に

⁸¹ grauwackeとドイツ語で表記しているが、砂岩の一種。フランス語の対応が分からなかったためだろうか。独仏辞典にはgrès des houillèresとある。

⁸² pyrite（パイライト）は黄鉄鉱のことで、黄銅鉱ならpyrite de cuivreであるが、ここでは、パイライトを黄銅鉱の意味で使っているようだ。

⁸³ cataracteとしているが、大滝ではなく、土地ではChapman's Chuteと呼ばれている落差の小さな滝。

行ったところでは黒鉛が見つかる。私はニピシグ族やオジブワ族⁸⁴のインディアンたちが金を含んだ水晶の塊を持っていることに度々気づいた。彼らはとても穏やかな人たちで、湖の北部沿岸に猟場を持っているのだが、そこにあるニピシグという小さな村で生産物を交換し合うために、時々村にやってくる。

ニピシグ湖の東にあるトラウト湖の沿岸では、ごつごつした石灰岩が発見される。

サウスリバーとコマンダという二つの川は、新しい入植地に注いでいる。この二つの川は工業にとって重要な動力源となる。今から四半世紀の間に、製鉄所と工場の煙突が今とは別の光景を見せ、まったく現状とは異なった様相を呈するだろうと私は予想している。そしてどんな滝の轟音でさえも、あわただしいハンマーを打つ音でかき消されてしまい、滝の音が処女林の中をこだますることはもうないだろう。この二つの川は一年中豊富な水があり、決して低水位になることはない。川の水は鉄分を多く含んでいるものの淡水で、人間にも動物にも、水量が豊かな水よりもこちらの水のほうがこの地方では好まれている。この地方の気候はとても健康に良いのでここでは病気になるケースはとても珍しく、医者や薬に頼るのはせいぜい外傷のときぐらいだ。私たちが滞在した家の持ち主は、紛れもない健康体をした幸せな8人の子供⁸⁵を抱えていた。

下流の滝近くのサウスリバーの幅は18フィートの水深に対して80フィートあり、後に蒸気船での航行の出発点となるだろう。その幅はここから1マイルごとに増していき、河口近くでは約200フィートにまでなる。その河岸は切り立っているがニピシグの辺りでは低くなり、1マイルにわたって河口以上になだらかになる。そこでは毎年春に平野が数マイルにわたって浸水する。切り立った河岸は、美しいマツやヒマラヤ杉、カシワ、ブナ、カエデなどの木々が縁取られ、ところどころ梢同士が絡まり、川の上流から中腹に渡って、まったくもって趣のある印象を持った自然の天蓋になっている。鏽の成分で飽和状態の水がある一方で、川床に沈殿した黄土の堆積物もあり、これらはともに、水面の反射に関して、天然の金属の集まりのように水面を反射させている。川の二つの

⁸⁴ カデルリーはOjebbewayと表記しているが、オジブワ族はOjibwe、Ojibwa、Ojibwayと表記される北米の有力なインディアン部族の一つである。ニピシグ族とは近縁関係にあると言われている。

⁸⁵ 村史によるとビーティー家には子供が8人だったようなので、カデルリーの訪問時にはすべての子供がそろっていたようだ。最初の2人（James、Nancy）はニピシグ村への入植前に生まれているが、残りの6人（Robert、Maria、Alex、Hattiem、Sarah、Frances）はニピシグ村で生まれている。

滝の間では、その深さのせいでゆっくりとしか水が流れないので、風いでいるときは水面にまったく波が見当たらない。その時自然の鏡は、青々とした丸天井と、木の葉でできた天蓋を鮮明に映し出す。それがあまりにも鮮明なので、カバノキの樹皮でできた小さなインディアンの船の中で、乗組員たちは、青々として静かな森の迷宮の上の空を通り抜け新しい世界を旅しているような気がするほどだ。

コマンダ川の河岸でも同じような自然の美しさが見られる。転々と島がちりばめられた小さな湖の岸辺でも同様である。これらの川や湖には良い魚がたくさんいる。中でも、大きくて味も良いサケ⁸⁶は取り上げるに値するものだ。

私たちは帰路の途中、マガネトワンの周辺にあるハノーファー王国 (Hanovre) 出身の⁸⁷マテイス (Matheys) 氏の所有地を訪れた。数年前に所有地に定まったところだ。人々はまるでその所有地がこの周辺地域で最も美しいかのように表現したが、私たちはすぐにその表現が極端ではないということを確認する機会をえた。ニピシグ村でビーティー氏がそうであったように、マテイス氏は400エーカーのとても良質な土地を所有している。そしてマテイス氏はすでにその土地を約80エーカー耕作地にしてしまっており、さらに1年当たり20エーカーずつ広げていっている。彼は土地の状態が農業に向いているとして、北ドイツのやり方にしたがってそこで農業をしている。ニピシグ村では大多数の場合イギリスの農法が採用されているが、この北ドイツ式のほうが選ばれるに値する農法である。この農家で保有されている家畜は、この地域ですで見ただけで最も素晴らしく最も健康的である。なぜならこれらの家畜は、とても清潔でよい状態の家畜小屋で飼われていて、必要な世話によって、その清潔さや食物、水遣り、家畜小屋の空気や冬場に必要温度をもたらされているからである。家の中でも畑でも、いたるところに秩序がよくいきわたっていて、マガネトワ

⁸⁶ truite saumonée と書いている。仏和辞典にはベニマスと書いているものもあるが、必ずしもベニザケ (ベニマス) を指して使う語でもないようだ。現代ならニジマスのことを truite saumonée と書く場合もある。「サーモン色のマス」は赤みがかった肉の色を指しているのだから、ベニザケ (ベニマス) の陸封型のヒメマスのようなマスというより、海から戻ったサケの種類を指しているのだろう。もっとも、2010年にノースベイ市を訪問した際にニピシグ湖やトラウト湖の湖畔のレストランで何度か食事をしたが、夏だったせいか、サケ・マスはなく、魚では、小型のカワカマスの pickerel が食べられているぐらいだった。なお、この辺のインディアンは古くは交易にもこの種類の小型のカワカマスを乾燥させて使っていたという説明の案内標識がニピシグ湖畔にあった。

⁸⁷ 報告書には Hannovre とあるが、正しくは、Hanovre。オンタリオ州南部にも Hanover という地名があり、ここから移ってきた可能性もあるが、報告書では de Hannovre ではなく du Hannovre と書いており、ドイツ連邦として1866年まで存続したハノーファー王国のことだと思われる。

ンの沿岸は絵になる情景である。この秩序と情景とは訪れる人々に対しよい印象を与え、その印象が滞在をより長い時間に伸ばそうと人々を誘った。私たちは自由にとどまることのできた数時間だけ滞在時間を延ばすことができた。

できる限り実際の情報そして同時に、できる限り私がニピシング湖沿岸の探検の中で得たものに制限した情報。今回の報告では、そういった情報のみを、移住する覚悟をした同国人に提供するにとどめた。もし私の個人的な意見を述べるのが許されるのであれば、私は次のように述べるだろう。新しい入植地にたどり着いた勤勉な移民は（もっともそういう勤勉な移民に限るのであるが）、非常に健康に良い気候と、とても豊かな土地、そして専用パンフレットで公表されている入植地における州政府が作った大変有利な条件、そして最後に私たちの共和主義的政体とは少し異なる、自由主義的政体、彼ら移民は、これらの気候と、土地と、政体のおかげで以下のことが可能になる。それは、困難な始まりと数年間のつらい労働の後には、素晴らしい農地に加え財産が、つまりそれらの家族に幸福と将来を保証する二つのものが認められ所有することができるのだ。ビーティー、マテイス⁸⁸の両氏の所有地や、私が見たほかの多くの所有地のような実例によって、私はこの見解に対する気持ちを固めた。私の意見からすれば、地方での状況を考慮に入れ、新しい祖国には孤立した家族で行くのではなく、多少人数の多いいくつかの家族の集団で行くべきだといえる。なぜなら、移民生活の始まりはいつもきまって骨の折れるものであるが、隣人間の相互扶助によってこの骨折りははるかに容易なものとなるからだ。さらに祖国を離れたときに感じる孤独感も隣人によって我慢できるようになる。しかしながら私の考えでは、孤立した家族で入植地に行くことは、（この2点の問題だけでなく）さらに深刻な事態を引き起こす、つまりこういうことだ。入植地に1つの家族だけしかいないということが生じた場合、子供たちは学校教育を受けられないままになってしまうのだ。というのも政府は、頻繁に通学する十分な数の子供がいる町にしか、無償の学校を設置しないからである。そもそも、2、3家族のために教師にかかる経費を維持するのはあまりにも費用がかかりすぎるのだろう。

最後に、私はこの報告によって、同胞のスイス人にこれらの地域に移住するため祖国を離れるように説得したり、それを推奨したりする意図を持っているわけでは必ずしもないということを、読む人が忘れないでいてくれることを懇

⁸⁸ 報告書の他の場所ではMatheysと書いているが、ここではMatheusと書いている。

願する。私はスイス移民のことを考えて、ニピシング沿岸部の探検旅行に取り掛かるように頼まれた。私は人々から求められたことをなした。そして、報告を公表する許可を出した。それは祖国を移住する奨めとしてではなく、もっぱらすでに移住を決心した人々を導くガイドラインとしてだ。短かった私の滞在中には、私の認識に達しなかった状況も存在しうる。そしてその状況が私の報告の美しい側面に大きな影を落とすことになるかもしれない。私はこの報告によって誰かを行動に出る気にさせることに関して一切の責任を負わない。その人物は後で私が責任を負わないことと移民をしたことそれ自体の両方の理由でその行動を後悔するかもしれない。スイスでは、国土と生産可能な土地が小さい割には人口が多く、また常にその人口が増加している。工業が栄えていることを無視すると、土地の大きさに見合わないスイスの人口は、スイスと反対の状況が存在している地球のほかの国々、すなわち耕作可能な土地が豊富にあるのに、住民が不足していて、働き手が足りないという状況の国々と相殺しあう原因となっているだろう。アルプスのふもとに住む家族の世帯は、大家族と比べるとあまりに小さい。母親は、もうどうやったら子供全員を養えるか分からなくなっているものの、子供を手放す必要性を母親が認めるには痛みを伴う。ところで、母親の心配というのは外国であってさえも、移民についてまわるものだ。母親は子供たちに新しい祖国を選ぶことを早まらないように言い、あまりに打算的で殆ど信頼できない助言者が与える影響から子供たちを守る。移住した息子たちと海で隔てられているとはいえ、故郷は彼らを注意深く見守り、彼らが新しい祖国の中に見つけた喜びや幸福を楽しみにしている。祖国の兄弟たちはニピシング沿岸部に向かうだろう。そしてよく考え、歩んだ後にそこが彼らにとって幸福の源となるだろう。それがこの短い拙文に付け加える私の最も率直な望みである。

この報告の英文要約⁸⁹は、州の農業と公共土木工事を担当する部局の強い要望があったので、そこに置かれることになった。また毎年出版される広報の中にこの報告が掲載されるだろう。

⁸⁹ この英文要約そのものではないが、カナダ農務省（DEPARTMENT OF AGRICULTURE 1880）は、HAHN（1878）やカデルリーの報告の英訳の要約などから編集された内容になっている。

トロント [オンタリオ]、1873年11月24日。

ジャック・カデルリー
鉱物学教授
ベルン出身 (スイス)

